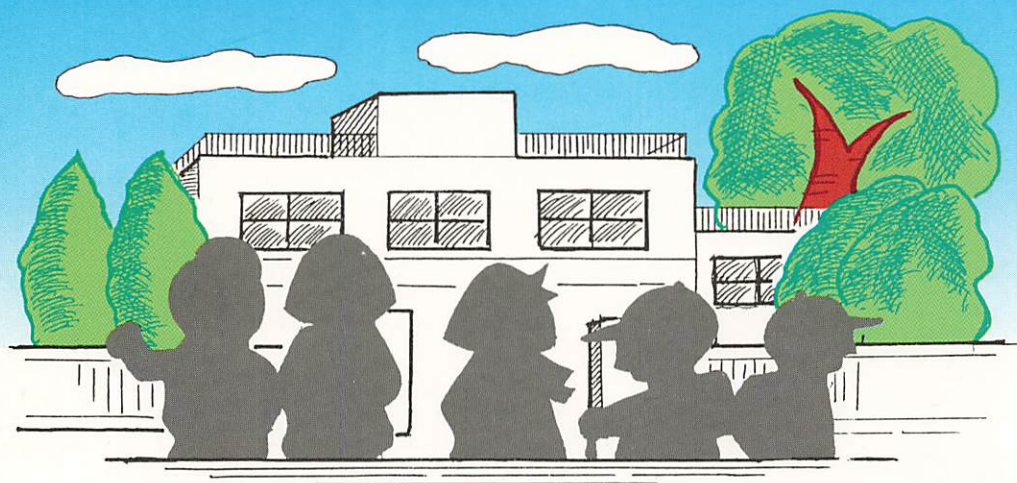


教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐるって

—— 子供の心を探りよりよい対応を考える ——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・ 菅 龍一

(児童文学作家・和光大学講師)

・ 竹内 直樹

(横浜市立大学医学部
小児精神科助教授)

・ 永田 實

(横浜市立舞岡中学校教諭)

コーディネーター

・ 林 洋一

(白百合女子大学助教授)

1992年 2 月 29 日(土)

於：相模原教育会館

○司会 それでは定刻を五分ほど過ぎましたので、第一回の教文研教育シンポジウムを開催させていただきます。私は全体の司会を務めます教育文化研究所事務局長の谷口と申します。よろしく願いいたします。

それでは初めに、主催者であります神奈川県教育文化研究所の倉持巳佐男所長より皆様にごあいさつ申し上げます。

あいさつ

○倉持 皆様今回は、土曜日の午後、何かとご多用の中、多数ご参会いただき大変ありがとうございます。

ご参会の皆様には心から敬意を申し上げます。

本日のテーマは、ご案内のように、「不登校」でございますが、この言葉は、昭和三十年代には「学校恐怖症」と言われておりました。以降、「登校拒否」と言われるようになってきております。



私どもは、その「登校拒否」と言われている子供の心のありようから、「登校拒否」よりも「不登校」の方が適切ではないかということで、こういう呼び方をいたしております。

昨年十二月に発表されました文部省の「平成二年度問題行動白書」を見ますと、全国の公立小・中・高におきまして、いわゆるいじめは減少してきているけれども、校内暴力、登校拒否の件数は年々増加をしてきているということが明らかにされております。

具体的には、文部省の言う登校拒否について申し上げますと、平成二年の学校基本調査の数字によつて国公私立小・中合計で四八、二三七人に達しているというふうに述べております。この数字は、昭和六十年の三一、九九七人と比べますと、約六十六％の増加であります。

私どもの県教育文化研究所では、事業の一つといたしまして、電話教育相談を十年前からやってきておりますが、昨年の四月から本来の一月までの、八月を除く九ヵ月の受け付け件数は二六一件でございます。相談内容の種別は十七項目に分かれておりますけれども、その中で最も多いのがこの不登校問題で、これが七十三件となっております。これは全体の三十％に及ぶ数でございます。相談者はすべて母親でございます。

不登校に陥つた直接のきっかけは、友人関係、あるいは教師との関係、学業不振、クラブ・部活動への不適応、親子関係をめぐる問題等々、極めて多岐にわたっております。

また、不登校の子供の対応もさまざまですが、最近の特徴として挙げられているのは、小・中ともに不安など、情緒的混乱の形、無気力の形、これが上位を占めていることが報告をされております。

現在、不登校は学校教育におきまして、子供の心にかかわる重大、かつ緊要の問題となっております。いろいろの原因、きっかけ、対応があるにしても、不登校とは、子供が学校へ行かなければならないという自覚を持ちながらも、当人にとつてのつびきならない理由があつて、内心では、学校へ行きたくない気持ち、行けない気持ちが強く、いろいろ葛藤の後、結果として学校へ行けない状態であるという認識を、子どもは持っております。

まず、何よりも子供の心を知る、理解するという基本に立つて対応を考えることが重要であろうと思ひます。

こうした趣旨から本日のシンポジウムを開催をいたしたわけでありますが、シンポジストの先生方

のお話をもとに、皆様方の体験、お考え、ご意見を発表、交流していただき、限られた時間ではございますが、実り多い会となりますように心から切望をいたしまして、ごあいさつにかえます。

ありがとうございます。（拍手）

○司会　続きまして、本日のシンポジウムの後援もいただいております、相模原市教育委員会の学校教育部長の芦野鐵男様からごあいさつをいただきたいと思います。



○芦野学校教育部長　ご参会の皆様、ご苦勞さまでございます。

神奈川県教育文化研究所の肝入りで、不登校にかかわります問題につきまして、こうした学習の機会を設定いただきましたこと、大変私どもといたしましても、うれしいことに存じております。

相模原市におきましても、この不登校の問題は大きな教育課題でございまして、日々、それぞれの学校で、この問題について保護者の方々とともに手を携えて、先生方に懸命の努力をいただいております。

そうした中で、昭和六十年、本市では「相談指導学級」を設置いたしました。今日まで七年間の中で、おおよそ百余名の子供たちが自立のための学習に取り組んできているわけですが、まだまだ引きこもりの子供たちへの手がなかなか差し伸べられないということで、平成三年度からは学校外のマンションの一室を借りまして、適応指導教室「銀河」と呼ぶ教室を開設いたしました。現在、十八名でしょうか、在籍をして学んでいるわけですが、このことで問題の解決ができています。わけではございません。

過日も、市内のある小学校の校長先生とお話をする機会があったわけですが、その学校に

何人かいる不登校の子供に学校の先生方が一致した姿勢で、父母の方と手を携える中でかかわり、働きかけをしていく中で、見事な成果を上げることができたというお話で、大変感動的なお話であったわけですが、その校長先生がおっしゃるのに、「子供の顔をいい顔にするのが教育だと思えますよ」という大変示唆に富んだ表現なんです、拒否症状を起こした子供の表情が晴れやかであるはずはないわけでございます、それを克服した子供たちの顔が全くすばらしく輝いて見える。そういう子供の顔にしていくことが私たち教育に携わる者の務めなんだろうということを、そうした経験の中でしみじみとおっしゃっておられました。

本日、四人の先生方のさまざまなご提示を拝聴させていただく中で、私どもも、ともどもにいい顔の子供をつくる、そういう日々の取り組みを改めてしていかなければならないというふうに感じています。

私にとりましても、またとない学習の機会とさせていただくつもりでおります。

本日は、シンポジストの先生を初め、ご参会の皆さん、本当にありがとうございます。よろしくお願いをいたします。

言葉が足りませんが、教育委員会のごあいさつとさせていただきます。（拍手）

○司会 それでは、シンポジウムの方に移りたいと思います。

ここからは、当研究所の研究評議員、そしてまた教育相談室の相談員をしていただいております、白百合女子大学助教授の林先生にお願いして進めさせていただきます。よろしく願います。

シンポジウム



○林(コーディネーター) ただいまご紹介いただきました、白百合女子大学の林と申します。

本日は、「不登校をめぐる」ということで、サブタイトルが「子どもの心を探りよりよい対応を考える」。このシンポジウムの司会・進行を務めさせていただきますと思います。よろしく願います。

それでは、早速、シンポジストの先生方のご紹介をさせていただきますと思います。

まず、一番最初にご発言をいただきますのが、永田實先生です。(拍手)

永田先生は、横浜市立舞岡中学校の教諭という立場でいただいているわけですが、特に相談指導学級担当ということで、不登校の子供たちへの対応ということに、大変深い経験を持っています。

続きまして、竹内直樹先生をご紹介します。(拍手)

竹内先生は、精神医学の立場から不登校の問題についてお話しいただくことになっております。

さらに続きまして、菅龍一先生をご紹介します。(拍手)

菅先生は、お手元のプリントですと、児童文学作家・和光大学講師というふうになっておりますけれども、元神奈川県下の定時制高校の先生をなさっております、子供の不登校の実態等についても

大変よくご存じの先生であります。

それからもう一方、私の横におります広瀬隆雄先生をご紹介します。（拍手）

広瀬先生は、神奈川県教育文化研究所の研究評議員で、特に今回は教育学の立場から指定討論をお願いしたいということで、おいでいただいたわけです。

それでは、早速ですが、永田先生、よろしくお願いいたします。



○永田 私は、ずっと中学校の教員をやっておりますが、不登校の子たちとのつき合いということでは、かれこれ二十五年ぐらい、ほぼそういうことにかかわってまいりました。何で中学校の教員がそういうことにかかわってきたかということ、話せば長いことになりますけれども、今、大変不登校がふえておりますけれども、昭和三十年代の終わりに大変非行がふえた時期がありまして、そのころに横浜市教育委員会で、「専任カウンセラー」というふうに当時呼びましたけれども、教員でいながら学校の立場にしばられないで子供や先生や、親の相談を受けていく仕事をやってみないかとすすめられ、教員自身がそういうことを少し勉強して、教師としてそういう仕事に当たってみるのが制度化されました。

教員というのは、その中の一員ということで縛られてしまうことがあって、そのことが大変子供や親にとっては、一つの枠になってしまいうので、できるだけフリーな立場で、肩書き抜きで接していくことがないといふこと。しかも、学校というところは、私も長年住んでおりますが、やっぱり独特な社会でございまして、その中で言葉を通じて話していくことは、学校教員という体験を十分に持っていないとならないというところがあるんだと思います。

これは学校だけではなくて、日本の会社とか、そういうところもそういうところがあるのかもしれない。それが今アメリカやECあたりから「日本独特の何とか」というふうに言われていることで、そのおかげで大変教育も、経済も大発展を遂げてきたということはあるんですが、それは逆に、人間にとってのある種のひずみを起こしていることもたくさんあるのかもしれない。

そんなことで、私がフリーのカウンセラーのような仕事で学校を回り歩いていくときに、非行を起こしている子たちとも大変楽しいつき合いができました。と同時に、既にそのころ、昭和三十年代の後半から四十年代にかけて学校に行かない子たちで、そのまま一年も、二年もほうりっ放しになっているという子たちがいて、そういうところの家庭訪問をこつこつして回りました。

そういうことではたたくさんの印象があるんですけど、そのころから学校の先生とわかつちゃうと、そういう子たちはピシャツととびらを閉ざして、部屋に駆け込んで、押し入れとか、トイレとかに隠れてしまうということがあったわけです。ただ私、顔を知らないからひょつこと訪ねていくと、学校の先生でないと子供たちが会ってくれるという事実が沢山ありました。

逆に、子供の方から聞いてみると、学校の先生が来るといのは、予知能力というか、予感でわかる。大体五十メートルぐらいまで近づいてくると、何となく胸騒ぎがしてきて、ということはいいます。不思議に学校からかかってくる電話も予知できるそうです。「あれは学校の先生がかけているに違いない」というので、そういうのには出ない。

大変神経のとぎすまされた状態のときには、人間というのはそういう感覚もすっかりできてくることがあるんだと思うんです。

一体、それほどに神経をとがらせてしまう学校というのは何かということも、そのころからいろいろ思いめぐらしていましたけれども、子供とつき合っていきながら、子供が学校の先生でも、我々

でも行ったら、「学校に行きなさい」「学校に来なさい」ということを前提で、たとえ笑顔をつくったって、それが腹の底に見えているということがあるんだと思う。それでピシャッと閉めてしまうんだと思います。

そういうことを裏返して考えれば、学校の先生は子供のところに家庭訪問で何をしにいくのかといったら、やっぱり何とか早く学校に来なさい。このごろは教育委員会やなんかの研修を受けてきて、余りそういうふうToStraitに言うといけないというので、「無理して来なくてもいいよ」と表現は変わってきているけれども、気持ちの中では、それはやっぱりあるわけです。

これは当たり前だと思うんです。それは責めることではないんですけれども、子供については、そのことは苦しいことだということを、私もたくさん思い知らされました。

子供は、学校に行かなきゃいけないとか、どうしたら行けるだろうかという思いは持っております。それなのに「行く気がない」「怠けている」「意思が弱い」「ちゃんとしてない」ということを、たたかれることによって非常にかたくなにというか、もうそういうところとは関係を持ちたくない。引きこもっていたいということを強めていくことを随分しているんだらうと思います。

なぜそうなるってしまうのかとか、その内面とか、いろんな問題については、この後の先生たちがいろいろお話しくださると思います。私は、いろんな子供たちとの出会いを思いますけれども、ある子のところに、十何回家庭訪問して通っていて、とりとめない話をしていて、何かちょっと話が進展しないなという思いがあったある日、きょうはちょっと様子が違うなと思っていましたら、子供が「いつも来てくれるけれども、いつまで僕とつき合ってくれるつもりがあるのか」ということを切り出してきました。「僕は、ずっとこうやって訪ねてきて、君とのつき合いは続けるつもりだよ」というふうに言いました。「それなら、きょうから僕は自分のことを話をする」と言いました。「今まで悪いけど、

先生を試していたんだ。どうせ来てくれているけど、それは仕事だから来ているんだろうと「思った」ということで、その日からその子は、自分が学校に行けないことがどれだけつらくて、そして夜も眠れないで、どう過ごしているか、どういうことを思っているかということをポツポツと語ってくれるようになりました。

つまり、その間、私がテストを受けていたわけです。教師は子供にしょっちゅうテストをしています。しかし、教師も子供にテストをされているということは、教師も気がついてないし、親も子供をテストしていることが多いんだろうと思います。

その中で子供というのは、親とか教師とかという外枠とか、肩書きを抜きにして何を求めているのか。やはり友だちがいらないということは常によく言うことですけれども、それを広げてみると、本当に心を開いて触れ合う大人や友だちに出会ってることがなかったというのが、「そういう場所じゃないところにいく意味はない」ということを引き起こすんだろうと思います。

そういうことを考えに置かないで、「なぜ学校に来ないのか」、そういうことでのいわば原因追求みたいなこと。悪く言ってしまうと、取り調べみたいなことをソフトにやる。原因がわかれば、それではつきりするのかというと、これは後のお話でまた出てまいりますけれども、それはそんな簡単なことじゃないということです。子供の気持ちの中にあるいろいろな複雑な思いというのは、そんな簡単なことじゃないと思います。

しかし、私が数多く見てきたことの中で言えば、教師側の発想というのは、集団に参加できないというのとはだめじゃないかということがまずありますね。そういう子はだめな子であるということがありません。

集団に参加できないのはどうして参加できないんだろうか。あるいはできない子がだめな子なんだ

ろうかということを問い直して見る必要があるんだろうと思います。

つまり、学校に行けないということがイコールだめなことなのかどうか。ある時期にこういう条件のもとでは行けないということを考えてみなきやいけないわけで、その子たちがずっと最初から、小学校一年生から、最初から行かなかったわけではないわけです。その辺の子供の心の動きということをやっぱり考えてみないといけないわけです。

もう一つ、教育というのは何をすることなのか。学校の先生からすれば、とにかく学校に来なきや教育のしようもない。そこは連れて来るまでは親が厳しくガンガンとやらなきやならないということがよく話題に出ます。

教育というのはもともと何なんだろうか。これは学校に行かすことをもって教育とすることではないだろうと思います。その子供自身がどれだけ豊かに、それこそ顔色が輝いて、そうやって一人の人間として成長していくか。それを助ける仕事。その助ける仕事は、学校の教室でしかできないのかどうかということまで問われてくることだと思います。

子供は、学校ということ以外の中でも育っていくわけです。そういうことでは、むしろ教育の古典と言えるルソーの「エミール」なんていうものは、そういう視点から書かれていて、教育とは何かというの、そういうまだ学校なんかが組織化されていなかった時代、既に人類五千年、八千年の歴史の中でずっと行われてきたこと。学校という制度をとってきただけだか二百年。日本の中ではまだ百何十年ということにしか過ぎません。

それ以前にも人は豊かに育っていた。現代よりももっと豊かに育ってきた時代をたくさん私たちは知っているわけです。

その中で私たちは、休んでいる子供も教育を受けていく、何かを学んでいく、自分の心の栄養素と

して含んでいくことは何かあるはずだと考えていきたい。それは例えば子供の家に訪ねていくことで、その仕事をすることもできるはず。だから、「学校にいらっしやい」というために家庭訪問をするのではなくて、その子供の家に行つて、その子供とそこで出会うこと。教師が何かその子に栄養を与えることができるならば、それは教師が臨機応変にできるはずだというふうに思います。

一対一という触れ合いの中から初めて教師が持つている教育とか、あるいは大人が伝えたい、親が持つている何かというものはそこから始まるんだろうと思います。そこが切れている状態の中で、いかに揺さぶろうが、ひっぱたこうが、問題は解決しない。今、ひっぱたくという表現をもって体罰ということを思いますけれども、体罰がどうしてこれだけ問題になってくるのかといったら、接点がないところでどんな暴力をふるおうが、それは何の意味も持たないわけです。逆に言えば、我々の経験、我々自身も、私自身も体罰を受けてきた経験があります。だけど、振り返ってみると、ときには、多分親なり、教師なりと回路が通じていたところがあつたからなんだろうと思います。

だから、回路を通じるためにひっぱたくんだとか、あるいは暴力はいけなから言葉でどうこうといったような、岐路にいつて、人間が何だということが見えない状態の、基本をずれた論議が多過ぎるんだろうと思います。

とにかく休んでいる子供にとっては、学校というのがとっても重たくて大きい存在に思えてくる。そこに行かないと自分の人生がなくなってしまうというふうに思う時期があります。これは本人もそうです。親もそうです。

私は学校の中にいて、学校という存在はそんなに大きいもんならうか。確かに日本の学歴制度というのは崩れておりません。どういうふうに変形したかという点、東大をトップとする極端な鋭角三角形の形は崩れました。しかし、逆に言えば、非常に鈍角な形で、すそ野が広がっている。高校を

出ていなければ一人前じゃないという社会状況がますます広がっております。

こういう社会状況は、学校依存型の社会状況は、日本の社会はいまだに変わっておりません。すべてのことが学校教育の中に求められるという時代は、なお変わりません。これがこれから問題になってくる学校五日制の問題についても、議論を見ていると、「とんでもない」という意見がまだ多数を占めているという状況から見られると思います。

そういうことの中で、子供にとって学校というものをもっと相対化してあげる。小さくしてあげる。それよりも大事なのは自分なんだ。自分の生き方なんだ。自分の存在なんだということをどうやって伝えてあげられるか。これは親の仕事でもあります。人々の、社会全体の仕事でもあります。ただ私は、教師がそれを自分の子供にどう伝えることができるか、語れるかということについて、やっぱり問い直してみたいと思うんです。

さっき申しましたように、子供たち、こういうふうにならないうちの子供たちの多くは、小学校時代、そのあたりのところから、いい友だち、いい先生にめぐり合っておりません。逆に言えば、そういうめぐり合いがあった子供たちは、ある時期休むことがあっても、かなり早く違う歩き方を始めます。

だから、教師というのは、どんな存在なのか。日本社会の独特な問題があると思います。私は、アメリカから帰国した子供で不登校になった子供からやはり言われました。私も日本の教師の端くれですから、同じことをやってしまうんです。「将来どうするの」と言ったら、「私、漫画が好きだから、漫画を書いてやっていきたい」。僕は平均的な日本の教師として「漫画かいて一生やっていくというのは大変だよ」と言ったら、ピシッと、「どうして日本の先生は、個人のそうやった生き方に口出しをするんですか。アメリカでは、私はそういう経験は一度もなかった。自分が漫画が好きで漫画をやっている」ということに対して、それは個人に対する干渉でしょう」。

私たちは考えてみると、進路指導とか、いろいろな名目でもって子供の生き方に対して大変なおせっかいと世話やきをしていると思います。不登校になる子たちは、親たちが過保護だとか、過干渉だとかという議論がずっと続いております。それは事実かもしれませんが、しかし、私は、教師がそういう言葉を親に向かって言ったときに、自分たちはそういうことをしてないのか。余計なことをしてないのか。「勉強しなさい」とか、「テストがあるよ」とか、「宿題をやつてこないかどうか」、「ハンカチを持ってきているか」とか、「つめがどうか」ということも含めて、それは子供のしつけどいことを言いながら、どこが子供にとって生きていく上での大事な部分で、その部分については過保護であつたり、過干渉であつたり、子供が非行化しないために手を出し過ぎて、ルールを敷いていることがたくさんあり過ぎやしないか。子供の生きていく力を育てていく。その教育という仕事は何なのかということについて考え直す必要があります。

不登校の子は弱いとか、意思薄弱だとかと言われますけれども、私の話なんかを受けつけてくれない、そういう意味のしたたかさというか、強さというものを思います。「学校に行け」と言ったら、はっきり言えば、行った方が楽だと思えます。それを自分の生き方として行かないということをしつかりある期間持っていることに對して、それを受けとめなきゃならないと思えます。

早く行く子はいいい子で、いつまでもぐずぐずしている子はだめな子で、これはそういう価値観は外して考えてみなきゃいけない。

そういうところの中で改めて私は不登校の子たちが自分らしく生きていくということで、それを模索していて、自分らしく生きていく道を見つけることになれば、ある期間学校を休むということが、その子にとって果してマイナスであるかどうかというのは、もっと広い視野で考えなきゃならないだろうと思います。

時間ですので、まとめて言うと、私は、教師のサイドから考えてみるということのは、集団に参加できなければだめだ。あるいは初めに集団ありき、そこに入れない子はだめだ。あるいは集団でなければ教育活動はできないという前提をもう一回疑って考えてみる必要があるだろう。そういうことをとりあえず私のポイントとしてお伝えしたいと思います。

以上です。

○林 どうもありがとうございます。

さまざまな立場から不登校の問題について、長いご経験を通して貴重な示唆をいただいたかと思えます。簡単にまとめてみますと、例えば教師という肩書き抜きで不登校児と本気になってつき合うことが非常に大切であるとか、あるいは教育とは何かという根本的な問題をやはり見直す必要があるとか、あるいは休んでいる子供にも学ぶことはあるんじゃないか。

つまり、学校に行かせるために家庭訪問するのは誤りではないか。あるいは日本の社会が余りにも学校に依存しているのではないか。

こういった点につきまして、さまざまな示唆に富むお話が伺えたのではないかと感じております。それでは続きまして、竹内先生、よろしく願いいたします。



○竹内 小児精神科医の立場から三つの話をさせて頂きます。最初に「見えない心を大切にすること」次に「連携することについて」最後に「不登校の子供への援助」というテーマで話を進めたいと思います。

最近是不登校が話題になることが多いのですが、それが使い古された流行語で終わってしまうのではないかという危ぐを抱いております。あるいはその当時者である子供の心とはかけ離れた言葉にも聞こえることがあります。あえて言わせていただくと、「不登校」をどのようにするかということよりも、もっと大切なことに目を転じていただきたいのです。それは目に見えないもの、言い換えると一人一人の心を大切にできるかということです。例えば不登校は「学校へ行けた、行けなかった」ということで、その関わりの失敗や成功に早急に結び付けて考えるのではなく、当時者の子供が不登校に際してどのように生きたかを把握することが大切だと思います。

「不登校」の研究をしたある学校で、その研究を進めたら「不登校の数が増えちゃいました」と恥ずかしそうに言われた先生がいました。不登校を恥ずかしいもの、あるいは悪いものと一律に考えることはどうでしょうか。目に見える「不登校」にこだわることは仕方のないことですが、その「不登校」の数よりも、むしろその水面下の、子供の見えない心の部分に焦点を当てていただきたい。あるいは本当に困っている人たちに私たちが優しくできるかどうかということについて考えて欲しいのです。

言い換えれば「目に見えないものを大切にする文化」は、不登校だけではなくいろいろなことの基盤になってきます。私たちの世代がお年寄りに優しくできるかどうかという問題にも、あるいは障害を抱えた人たち、心の健康が傷ついた人たち、心の体力をなくした人たち、そのような人たちに私たちはどのような思いやりが持てるかということにもつながります。また自分自身の心を大切にいたわ

れるかということにもこの文化は関係します。

神経性食欲不振症という心理的なことが原因で食べられない病気があります。その子供たちはある時期にある事柄にこだわってしまうことがあります。例えば、体重の値、成績の点数、もらう小遣いの金額などにひどく過敏になります。それらに翻弄されます。ときには自殺までも試みます。わずかな値の変化に苦しみ、そのようなならしない自分に絶望してしまうのです。目に見える数値しか信用できなくなり、その一方で思いやりや優しさ、あるいは人に愛されているとか心配されているとか、人に委ねるとか、人間らしい心もちや形にならないことは、頭では判つていても心では受け入れられないのです。数しか信じられないこのような子供たちは本当にかわいそうです。しかし私たちも経済や科学の発展と共に物が重視された中で暮らすうちに、「見えない心」を大切にできにくいような環境になってきたのではないかという気がします。

また心は見えないので一律に考えがちでもあります。子供の背丈は一律には考えません。背の高い人も入れば低い人もいます。これは当然の事です。しかし身長と違つて心の場合はこのことを当然とは受け止めません。実際には勝気な人もいれば、弱気な人もいます。これも当り前のことですが、現実には大人は子供の「心の体力」の違いを認めたがりません。そのように考えると学校という一律の集団の中に、皆が皆通うことと自体少し不自然でおかしい気がします。いろいろな子供がいて当然です。背の低い子供が武豊みたいな競馬の騎手を目指せば問題はないのですが、相撲の小錦みたいな大きな体格の子供が挑戦すれば無理が目に見えます。これはその逆もいえます。そのように子供の心にあつても、心のサイズにあつた社会を選択していけばよいのです。一律の理想のモデルということはありえないと思います。

そこで現代の教育に望むことを申し上げます。「不登校」それだけの対応を技術論的に考えることよ

りも、「見えない心」を大切にしていく、あるいは「心の健康」と言えるもの、不登校にいたる前の予防にこそ力点が置かれる時代に來ているのではないかと思います。このような視点に立つと、不登校の子供たちも大切ですが、不登校ではない現在通学をしている子供たちの心も同様に重要になります。その子供たちがやがては大人になり親になり、教員にもなります。そのときに心の問題で立ち止まったりつまづかなかった人たちが本当に優しくなれるかどうかということ、言い換えるとそのような文化が次の世代に伝えられるかどうかが大人たちの使命にもなります。また現在の教育の中でこそそれらを取り上げて頂きたいと思います。登校する子供、できない子供は区別であつて、差別であつてはいけません。

次に申し上げたいことは「連携」ということです。

第一に教育と親との連携です。学校の先生と子供が会うことよりも、親と子供が過ごしている時間が非常に長いという当り前の事実を考えて頂きたいと思ひます。そのためにも学校に來られない子供を援助していくためには、家族と学校現場との連携のもちようがきわめて大切になります。この連携をとる際にぜひラベルを貼らないということを中心にかけてほしいと思ひます。不登校の家族や親と会うときに、「過干渉だ」「冷たい親だ」「子供の言いなりの親だ」といったラベルを貼つて親に出会つていくということは非常にまずいありかたに思ひます。目の前にいる不登校の親と、同じ親同士という立場で出会っているかどうかといったことが氣になります。何かそこに「不登校」の親といった括弧をつきの会いかたをしていないかと氣になります。

またこれとときどき耳にすることですが、朝になると登校を渋る子供の親に「学校ではすごく元氣にしていますよ、心配のしすぎでしょう、出がけに子供がいきたがらないのは親の対応のせいでしょう」みたいなことを言いがちです。学校へ出てきた子供たちは元氣な場合も確かにあるわけですが、

朝の家庭の姿も事実です。一部の子供たちは学校では精一杯のカラ元気というか、子供なりに一生懸命頑張って無理をしていることもあるのです。自分が見ている子供だけが本当の姿ではないということです。子供の心にとってはいろいろな場所や、そのときの時間や、であう人によって態度や気分を変ええることは自然なことであります。カメレオンの皮膚の保護色のように変わるのが子供らしい生き方だと思うのです。恐い先生と優しい先生とはおそらく子供の態度は違うでしょう。これは悪いの問題ではないのです。そのように子供の生活圏全体の中で、一人の子供の心をまるごと理解することが必要です。自分自身の目だけを信じることは連携を円滑にさせないことになりがちです。

これは家族を見る目についても同様です。医者や教員は不登校の状況に子供が陥った家族に出会っているのです。これをその家族、あるいは親の全体像と短絡的に受け止めると大きな間違いが生じます。学校に行かなくなった子供をもった家族、特に親はやっぱ辛いわけです。大変苦しんでいます。それを「親が混乱してはいけません、元気がなくてどうします、元気を出してください」こういう言葉は余計な忠告に私には響きます。このようなことは立場を代えて考えればすぐに判ることだと思います。

次に学校内の連携です。

担任が一人で子供をみていく、あるいは養護教諭がみていくということではなくて、ぜひ連携をもっていたきたい。チームプレーでひとりの子供を見ていただきたい。いろいろな人の目に出会うことは、その子供の個性の発見の際には役に立ちます。子供を見るのは単に教員に限りません。用務員さんや給食に関わる人、あるいはクラスの生徒など、要するに校舎という中で共に暮らし、行き来をする人たちで、ある子供についての「良いところ」「素晴らしいところ」「弱いところ」「気にかかるところ」を見守っていききたいのです。そのためにも交流が大事です。そうすると意外なことに気づいた

り見えなかったところが見えてくるのがよくあります。特に何かにつまずいたり、落ちこぼれかけた子供には、ほめられるべきことや良いことを一杯言葉にして返していかないといいけません。そのような子供たちは自信を失っています。いろいろな人からいろいろな言葉でいろいろな角度からほめられることによって、心のエネルギーが与えられて生き延びることが可能になるのです。そのためにはチームでみていくという姿勢が大切です。

ただそのためにも不登校の子供を自分が治してやろうといった傲慢さはつつしみたいと思います。お節介にもなりますし、おこがましいことだと思えます。誰が援助の主役になるか、わき役、あるいは悪役になるか、これは大人が決めることではなく子供が選ぶ事なのです。担任だから主役ということではなく、たまたまのことで多くは決まります。その子供との相性も重要です。チーム全体を信用して、自分のポジションということをよく理解することが大切です。これは他の言い方をすれば自分の責任と限界を知ることにもなります。教師だからといった硬直した姿勢ではなく、その子供と自分との関係を素直に見つめ直すことが大切です。

チームの主役はできれば子供自身がつとめられたら最高です。援助する側の手柄話に終わる事なく、子供自身が手柄を立てる、つまり「自分が頑張った」「自分は乗り越えた」この実感が、将来の心の危機の際の予防にもなります。不登校に陥った軌跡を話し合うことも大切ですが、心の回復過程の軌跡を子供と一緒にたどることもさらに重要なことです。

連携の話題の最後に、教員と子供との連携の話をします。これは繰り返しの話になりますが、不登校や長期欠席日数は目に見えるものです。そのために担任は「自分の受け持っている間に」何とかしよう、あるいは学期始めや学年末に何とかしよう、余計なことを考えることもあります。子供の心の回復のペースではなく、子供をとりまく教育のペースで考えてしまいがちです。そのような目に

見える欠席日数ではなくて、不登校という日々の生活の質に対して教育的配慮をしていただきたいと思えます。学校という場所だけでしか教育はなされないということではもちろんありません。

ある小児病院での経験の話をします。そこでは癌の転移で数ヵ月後には死ぬことを予測された子供にも教育がなされていました。その養護学校が開設された初期の頃に教員同士が話し合いました。一ヶ月後に死んでいくかもしれない子供にいったい英語を教えることは、どのような意味があるのか。かんかんがくがくの議論の末にようやく結論に達しました。その結論は死ぬ直前まで教育とは必要であるということでした。これは教室ではもちろんできません。病室のベッドの側での教育です。

不登校の学校に來れない子供の場合を考えてみます。不登校のために自宅に引きこもり日々を過ごしている子供たちにも教育はできるはずで、学校へ何とか連れだそうという立場ではなく、自宅でできる教育は何かということ。登校刺激を控えるということは、決して関わりをもたない、放っておくということではなく、その子供に負担のかからないありかたで、何らかの関わりをもつということとはたえず必要なことだと思います。

そのことで思い出すのはマザーテレサの映画の一シーンです。「愛することの反対は憎しみではない、無視することである」という台詞を強く思い出します。繰り返しますが、愛の反対は無視、すなわちその子供への関心を捨てることであると精神科の臨床でも痛感します。人を避けている子供であっても、違う意味で人を求めているという経験を数多くしています。そこで子供の心のストレスが高まっているときにどうやって関心を寄せればよいのか、その術が連携には大切です。このような「優しい愛の手」は子供一人一人によって違うと思います。私がしばしば使うアイデアは手紙です。手紙は一方通行です、これが良いのです。見たくないときは子供は破って捨ててしまえばいいわけです。手紙は何であれ大人側のホンネのメッセージを伝えていく、しかも粘り強く伝えていく、この姿勢が大

切です。子供が「教員にあいたくない」という言葉をそのまま額面どおりに受け止めていると、「もう先生にも忘れられてしまった」と思うようにもなります。やっぱり子供には寂しいことです。

マザーテレサが死にいく人の手をとって、死ぬことに寄り添ってあげたいというシーンがありました。辛い渦中にいるところに手をさしのべられるということは、やっぱり嬉しいことだと思います。安心が人一倍欲しいのが辛いときなのですから。そういう意味で日本の子供たちは学籍によって守ることができたらと思います。どのような子供でも学校を窓口にして、誰か大人に出会う機会が与えられているわけです。もしもその大人のイメージが、子供にとって相談しやすい人であつたら、いつも子供の心の中で対話が起ころはずです。「先生だつたらこういうときにどうするのか」そのようにイメージが心の中に宿れば心強さが違ってきます。

人が心に宿ることの大切さをもう少し話します。

一年位前にNHKで放映された「十日間の航海」という番組のことです。非行の若者たちを、ある牧師がヨットに乗せて大海原という大自然を一度でよいから体験してもらいたいと思いついて、いろいろな困難を乗り越えて十日間だけですが、海に連れだした記録です。その中で一人の若者が涙ながらに語った言葉が強く心に残りました。

涙ながらに語ったことは二つありました。ひとつは「俺はこの年になるまで、誰ひとりとして大人から自分の顔をきちゃんと見てもらえなかった」という言葉です。小さい頃から「おまえはいらないガキだ」「手の早いガキだ」「不良だ」「非行少年だ」「麻薬の売人だ」皆にラベルを貼られて、誰ひとりとして自分の顔をまともには見てくれなかったといつてきめざめと泣くのです。そのような不幸な子供が日本にも確実にいると思うのです。大人は子供を見ているようで、その一部の子供たちにとっては誰も見てくれない、判ってくれない、そのようなスレ違いが気になります。

若者のもうひとつの言葉も忘れられません。その若者は犯罪を繰り返したり、つかまったりする度に「今度は悪いことはやめよう、真人間になろう」と何度となく誓ったそうです。ただこの牧師に出会うことによって初めてこう考えました「あなたが会って判ったことは、今までは約束が守れなかったのは一人であつたからかもしれない あなたがいれば約束を守れるかもしれない」孤独で愛されない人にとって、心の支えになるような人が心に宿ったということは重要なことです。社会から一人ぼっちになったような状況で、心の中に支えになる大人のイメージが作れるような大人に出会えば辛い深刻な状況でも生き方は少しは変わるのではないかという気がします。

私の話の最後に、子供への援助、どのように手助けを考えたらよいのかという話をします。

不登校の子供にあつたときにいつも私は思うのですが「この子供は安心して毎日暮らしているのかな」ということです。おそらく難しい。多くの子供たちはイバラの日々の連続を生きているわけですからそこで私たち大人がこの子どもたちに何が援助できるのかということです。今私は「安心できる時間のプレゼント」がこの子供たちに届けられたらと痛切に思っています。

学校に通える子供がほとんどのときに、自分一人が学校に通えないということは辛いわけです。「明日は学校に行こう、明日こそ学校に行かなくては」そう思っても翌朝はやっぱり登校ができないのが多くの不登校の子供たちです。このような子供たちにとっては二十四時間のうちに八時間ぐっすり眠れば幸せだと思えます。中には眠れなかったり、悪夢にうなされたりの子供もいます。どうにか眠れた子供にしても、残りの起きている十六時間の中で、その子供が不安から解放された「生き生きした目」をした時間がいったいどのくらいあるのかと考えてしまいます。五分でも良い、そのような時間が明日につながってわずかでもいいから積み重なっていけばもつと良い。このような意味で「安心できる時間のプレゼント」も教育の援助にとっては大切なことのひとつだと思います。

次に申し上げたいことは「子供の心の窓」を大切にしていたいただきたいということです。前にも言いましたが子供は何かに関わりをもちたく思っているわけです。子供は子供なりに「心の窓」をあけてコミュニケーションを考えたり、うつ積したものを紛らわしたりもしているわけです。不登校の子供にとつて確かに不登校は重要な気がかりではありますが、それだけではないのです。不幸な場合は子供の心の窓が微妙に大人のそれとすれ違ってしまつて、子供は何もしゃべってくれない、判らないといった感想を大人はもってしまうことにもなるのです。しかしそのようなときは、子供自身も同様に大人のことが判らない気持ちになつてもいます。

学校に行かないで昼間からファミコンばかりやつている子供がいたとします。私が悲しく思うのは「この子はファミコンしかやらない」という大人の言葉です。そのような子がやがてファミコンすらできなくなると、その時間の過ごしかたのそれなりの意味に気がつくのです。ファミコンしかやらないと思つていた子どもがファミコンすらできなくなつて、ずっと寝たり、暴力をふるいはじめたりのような生活になると、そのような時間の過ごしかたの質の良さにも気づくのです。失つて初めて気づくことはよくあることです。

学校も似たような面があります。子供が通学しているときはたいした苦痛もないと思うのが大人です。休み始めて初めて「あの子はいろいろなことがあつたけれども一生懸命頑張つて通つていたんだな」と、失つて初めて気づくのです。

残念なことに、子供自身が内心では「俺はファミコンしかやっていない、我がままだ」と思つてることが多いのです。つまりこの机の上のコップに水が半分入つていますと、半分も水が入つていないというふうには子供は思わないのですね。辛い状況の子供はこのコップの上のほう、足りないところばかりに目がいきがちです。それでは私たち大人は子供に何がプレゼントできるかというところ、この水

が半分入っている、言い換えるとファミコンはできるんだ、ということの評価してあげることです。そして数多くのファミコンのカセットの中で、どうしてこのカセットに関心を寄せるのかとか、今までは視点を少し変えて子供のファミコンという「心の窓」を通じておしゃべりを進める中で、子供自身が自分に気がつく機会に変えたいものです。

次に不登校は「心のひび」の結果であるという話をします。学校に行かなくなったということは氷山の一角であって、実は海面下で目にふれない背景が問題になることが多いのです。不登校は子供が単純にだらしなく怠けているのではなく、何らかの「心のひび」が入っているのです。私はそのひびを全て精神病だ、というような乱暴な言い方をここでしているつもりはありません。しかし強調しておきたいことは多くの不登校は仮病ではないということです。ところが意欲がない、怠けているみたいといった「怠学」という言葉をときどき耳にします。「怠学」という言葉はきわめて厳密に狭い意味で使っていないと危険なことが起こるような気がします。怠学というと子供が悪いようにとれますが、多くの不登校の子供たちは子供自身も辛い状況下にあるのです。不登校は交通事故にでくわしたようなものでもあります。子供も何だか判らないけれども、足の骨を折ったかのように、あることが契機になって心にもひびが入って登校できなくなってしまうというようなものです。骨のひびが治るのに時間がかかるように心のひびにも時間がかかるのです。

その「心のひび」の援助の覚書を少し話します。

心のひびが入った状況では「成せば成る」という言葉は絶対にならないと言うことです。むしろ「成せば成らない」とでも言いたいくらいです。自分の根性、気構えなどではどうにかは成らないことが多いのです。むしろ治そうとすればするほど、「心のひび」をひどくする結果になってしまうのです。そのためにも治そうとあまり力まないで、その代わりに大人は、目の前の子供の存在全体を認めてほし

い、判ってあげて欲しいということです。不登校をしている子供を治すのではなく、生きているその子供を受け入れて欲しいのです。

次に「心のひび」を治すことの援助として「開かれる」ことを強調したいと思います。即ち悩みが生じたときは心の奥に閉じ込めておかなくて、開かれていくことが大事です。どうしても心の問題が生じると、自分の中で、家族の中で閉じてしまいがちです。何でもよいのですが、外に関心が向けばよいと思います。人間だけではなく、ほっとできるもの、例えば自然と出会うことでもよいのです。心をいたずらに点検したりするよりは、外に開かれて行くことです。もやもやした気持ちを言葉に代えることも「開かれる」ことですし、夫婦で話し合うこともそうです。閉じ始めると過去の些細なことが妙に気になったりしてしまうわけです。そういう意味でイソップの「北風と太陽」という寓話を思い浮かべます。不登校を何とかしよう、何とか治そうとすれば余計に難しくなってしまう、そうではなく家庭の雰囲気、学校の雰囲気、あるいは地域の雰囲気、多くのところでポカポカと居心地をよくすることが疲れた心には大事なことになるわけです。

最後に時間もまいりましたので付け加えて申し上げたいことは、今まで大人の悪口をいつているようにも聞こえたかもしれませんが、大人たちは自信をもって子供たちにのぞんでいただきたいと思うのです。私たち大人は子供たちを傷つけようとして意地悪をしてきたわけではないのです。謝るべき点はそれとして、何も子供たちに「腫れ物」に触るかのようなおよび腰ではますます子供が気の毒です。私たち大人に今必要なことは、教育も、親も、家族も、自信をもって生きることです。それなりに精一杯やっているんだと、自分自身をねぎらい支えることが大切です。何もこれは子供に対して開き直って威張るというのではなく、自分たちが生き生きと生きて暮らしていく、そのことが子供たちに最良のプレゼントだと思うからです。

以上です。(拍手)

○林 精神医学の立場から子供の問題を考えると、不登校という現象そのものを問題にするのではなくて、やはり子供の心の健康というのを考えることを一番大切にしなきゃいけないのではないかと。特に子供の見えない心を大切にすることが重要だというご指摘がありました。

そのほか、教師一人で見えるのではなくて、連携して見る必要があるとか、あるいは子供への援助の具体的な事柄について、さまざまな示唆に富むお話があったと思います。

その話は、次の菅先生ともつながっていくところだと思いますので、続きまして、菅先生、よろしくお願いいたします。



○菅 菅でございます。

現場の永田先生、それから今、お医者さんの竹内先生からお話があったので、私は少し角度を変えまして、児童文学作家としての不登校という話を皮切りにしてみたいと思います。

私那不登校に興味を持ったのは、自分自身がかなりひどい不登校児だったからです。理由は病弱だったんです。小さいときから、小学校の四、五年ぐらいまでですけれども、小児がかかる法定伝染病、例えば、皆さんご存じないかもしれないけれども、猩紅熱とか、ジフテリアとか、今では聞いたこともないような名前の病気を軒並みやります。毎年、毎年恐らく三分の一ぐらいは欠席する。病気が治って学校に行くと、もう授業がどっと進んでいて、それで何にもわからない。うちに帰って、「もうあしたから学校に行きたくない」と泣くんですね。おふくろが女学校の先生で、猛烈に強い女性でしたから、ものすごくしかるわけです。それで次の日に無理

やりに学校に連れて行かれる。

本当は落第してもおかしくなかったんだろうけれども、女学校の先生だったし、教育熱心だったから、学校の方は進級だけはさせてくれたんでしょね。それで何とか五年生ぐらいまでいったわけです。

それからもう一つは、実は私が中学一年のときに、日本が戦争に負けるんですけれども、そういう戦争中に病弱な男の子だった。自分たちの未来は兵隊であると、大変な大前提がありまして、そういう兵隊にとってもなれそうもない人間だということが子供心に非常によくわかっていまして、戦争に向かっていく学校の中の教育というのにとってもアレルギーがあったんです。

ですから、とてもつらい小学校時代を過ごしてきた。ただ、小学校の最後ぐらいになって少し立ち直るんです。多分こういうことは不登校児の中にいろいろあると思うんですけれども、全くの偶然の機会からです。

それはクラスの中で比較的強い子、いじめっ子なんですけれども、そのいじめっ子がたまたま私をなぶりものにした。私は、けんかなど一度もしたことがない子でしたから、どういうふうに対応したのかよく覚えてないんだけど、少しばかり背の高い子だったものですから、防衛するために相手をつかまえまして、グルグル自分の周りを五回か、十回か回したんです。そしたら、だんだん遠心力が働いて、加速度が加わってくるんですね。猛烈な勢いで相手が僕の周りを回っているんです。そのまま回し続けるのが恐くなつて手を放したら、相手は教室のうしろまで飛んでいって大ケガをした。つまりいじめっ子を偶然やつけたわけです。そのことがあってから、クラスの中の人間関係が一八〇度変わるんですね。それまで、僕はいつもいじめられてメソメソして、長い間休んでいて、たまに学校に行くと、授業は進んで「あしたから行きたくない」という子が、何だか知らない友だちがで

きちゃって、周りの友だちと仲よくなつて、ついでに言うとお決まりのコースですけれども、悪事を働くようになる。集団万引きとか、カツアゲ、今までの世界とは一八〇度違った世界に小学校の五年の終わりから六年にかけてなるんです。

それは今考えても夢のようで、どうしてあんなばかなことになったんだろうかと思うけれども、あの年齢にもう一度ああいう環境になつたら、やっぱりあの悪事はしたいな。とっても楽しかった。そういう思い出にあふれているわけです。

やがて戦争は終わります。戦争が終わる直前ですけれども、場所が変わるんです。それは疎開のようにして、それまで住んでいた大都市の長屋、母親が女学校の先生でしたけれども、その女学校の先生でお手伝いさんを雇って、私を育ててくれた長屋住まいから、今度は山陰の半農半漁の貧しい農村に変わるんです。それはおやじが禅宗のお坊さんでして、禅宗のお坊さんのお寺に疎開同然に変わっていくわけです。変わっていったところで終戦になるわけです。

そこで世の中の方が今度は一八〇度変わる。つまり、今までとても自分には向いていない、兵隊にならなければいけないという世界が全部崩壊するんです。兵隊にならなくてもいいということになったときの解放感というのは、とてもこれはまた子供心に変なもんだった。

もう一つ、大きな変動が私におとずれるんです。それは中学に入ったころ、今まで小学校のときはいつも授業についていけなくて、劣等生でわからない、わからないと思っていたのに、中学に入ってみたら、どうやら僕は数学や理科がほかの人よりもできる生徒らしいということがわかってくるんですね。そこに昭和で言うと、二十四年か二十三年か、私が中学の三年ぐらいだと思うんですけれども、湯川博士という人が日本人で初めてノーベル賞をもらうんです。そしたらそのときのノーベル賞の解説記事にこう書いてあった。「湯川先生の専門は、理論物理学だ。理論物理学というのは紙と鉛筆と頭

さえあればできる。つまり、貧乏な敗戦国日本にぴったりの学問である」と書いてあるんです。

「ほう、それではこれは僕にぴったりだな」と思ってたね。貧乏なお寺でしたからね。そうすると、人より少し数学や物理学ができそうだという予感がしたもんだから、「あつ、あれにかければいいんだ」。そういう目的意識を持ったときに、私は本当に生まれ変わった。

敗戦をはさんだ二、三年の間に三つぐらいの転機が訪れるんです。それで、それまでの私とはまるで変わった人間になる。

そういう不登校的な人間が変わっていくというプロセス。とっても私はこれは興味があったんですね。後に大学を出まして、教師になって、創作活動をやり始めるんですけども、その最初の児童文学の作品で、ためらいもなく主人公は不登校児にしました。学校に行けない子供をまず主人公にする。これはある雑誌に三年半連載して、単行本で三冊分の大河小説の児童文学なんですけれども、第一巻は予定どおり私の子供時代のことを考えて、病弱で登校拒否児ということで始まって、第一巻の真ん中ごろ、私のおやじがモデルである仙人和尚というのが出てくるんです。その仙人和尚が奥の院で不登校児の僕を育ててくれる。竹を伐ったり、椎茸を栽培したり、戦争体験を聞いたりするあたりがありまして、これが先ほど永田先生もおっしゃったんですけれども、ある書評家が二人が偶然「これはルソーの『エミール』の世界だ」と、こう言ってくれたんです。公教育としての学校を離れて仙人和尚が僕を育ててくれる。その教育方針、独特の教育で自然児として育てていくわけです。

さて、一巻を終わったところ、連載をどうしようか。かつての私のように学校に戻して、生き生きと学校生活を送らせようかと思っただけなんですけれども、そのころようやく世間で不登校の問題が問題になってきたんですね。いろんな論調、ジャーナリズムの論調や、学校の論調を見ると、不登校の人間を学校に戻すのが善だという論調なんです。つまり、いろんな人が苦勞して、学校に戻せばプラスにな

ると考えて、不登校をそのまま続けている子供はいかにも悪いような論調が多いので、「待てよ、これはおかしいな」と思った。ここで学校に戻したら、ますます世間の人は「やっぱり学校に戻るべきだ」と思うので、戻さないで、学校に行かせないまま大人にしようかななどと、作家というのはすぐそういう毒のある考えをしますから、世間の潮流に反するような書き方をしてやれと思って、とうとう学校に行かさないまま少年時代、青年時代を送らせて、普通の子供ならちょうど二十二歳、大学を卒業する年まで書くんです。その間に国内をいろいろ放浪していろんな人たちに出会い、それから国外にも出かけて行って、ちょうどベトナム戦争のころでしたから、ベトナムに行ったり、アメリカに行ったりして、最後はアメリカに渡って、当時のニクソン大統領に「ベトナム戦争をやめろ」などという直訴をしたり、児童文学だからこういうことができるんですね。荒唐無稽というか、何でも書けますからね。

それで二十二歳になって、いわゆる普通の子が大学を卒業する年齢まで書いたわけです。育ての親であった、僕のおやじがモデルの仙人和尚がそこで死ぬんです。そのみとりの枕元で僕がモデルの主人公がみとっているわけです。そうすると、仙人和尚がその子を見て「おまえは立派な青年になったな。日本じゅうのどの青年にも負けない立派な青年だ」、こう言うわけ。隣にいた親友のおじいさんに「この子がこんなに立派な青年になったのは、もしかしたら学校に一度も行かなかったからになったんじゃないか」、こう言わせるんですね。

これは冗談のように皆さんはお思いになるかもしれないけれども、そういうことを言われた方というのは、私が尊敬している人の中に随分たくさんいます。例えば、名前を出しては申しわけないんだけど、亡くなった宮原誠一先生という方がいらっしやって、私はとてもこの先生にかわいがられて、一緒に公害の調査に行ったりなんかしたんです。そうすると、地方の住民運動やなんかを訪

ねていくと、本当にいい青年がいっぱいいるんですね。そのいい青年というのはどうなのかという
と、せいぜい中卒、義務教育しか出てない。ときにうれしいのは、私は長い間定時制高校の教員だっ
たんですけれども、定時制高校を出ている生徒さんがいるわけです。それがその住民運動のリーダー
なんです。

宮原先生は東大の先生でしたから、東大の大学院の学生なんかを連れて行って、私もそこに一緒に
行っているわけです。そうすると、東大の大学院の学生を相手にしてにやにや笑いながら、私に「菅
さんね、地方のそういう定時制高校を出た青年は立派だね。見てごらん、この東大出た人間と比べた
ら、どっちが光ってる？ 輝いてる？」と、こういう皮肉を言っていた。

それは本当にそうなんです。実際に比べてみればそういうことはわかるんです。だから、偉い学者
の先生でもそういうことを言っていたらしゃったんで、私はとうとうこの物語を最後まで不登校のま
ま学校に行かせないで、しかも、「学校に行かなかったからこんな立派な青年になったんだ」という結
びの言葉で終わらせたわけです。

ただ、そればかりではよくないんで、次に書いた作品は、今度は不登校から回復する作品なんです
けれども、これは私がかつてそうであったように、不登校だった。今度は女の子なんですけれども、
女の子が主人公でして、その女の子があることで、また偶然なんですけれども、ある秘密というか、
一家がみんな隠していたようなことの秘密をかぎ当てるんです。

小学校の高学年の子どもというのは、知的好奇心だとか、正義感だとか、そういうものが突然のよ
うに、大人が考えられないような力を持って育つ時期で、その時期に大人との関係がうまくいけば、
パッと上にいくし、うまくいかないと大人社会になじまないで、逆に不登校の方に向かう。そういう
何か非常に大事な、小学校の五、六年生というのはとても心理的な大事な時期だということを、自分

のことを考えてもそうだし、自分の子供のことを考えてもそうだし、生徒たちのことを考えてもそうなんですから、そういう大事な切れ目の時期に不登校だった子供が劇的に今度は再生する物語を書くんです。

両方の目というのが私らにとっては必要じゃないか。大体作家は不登校であるとか、いじめであるとか、こういうのを主題に書きたがるもんなんです。どうして書きたがるかというと、いじめられていたり、不登校であつたりした子供と、それがいろんなプロセスを経て、今度はそこから解放された状態の子供の落差、それが飛躍的に大きいわけです。その部分をどういうふうにリアリティーを持って書くかというところに、作家としての一つの腕の見せどころがあるものですから、だれでも一度はそれに挑戦してみたいというふうに思うんじゃないかと思います。

さて、時間がだんだんなくなってきましたので、私も定時制高校の教員だったものですから、作品の世界だけで不登校を扱うのではなくて、実際の教師生活の中で不登校を扱わざるを得ないというか、そういう不登校児が周りにあらわれてくるという状況が、ちょうど高度成長が終わった時期、低成長に入った時期に入ってきます。

このときの話はまた後で質問でも出れば詳しく申し上げますけれども、一番最初に会った不登校児というのが、とっても私にとつては印象的でした。そのときにわかったことを二つだけ申し上げますと、不登校的な子供というのは、ある空間に対する特殊なセンスというか、感受性を持っている。

これは後で永田先生からも、十年前に私はお聞きしたことなんですけれども、例えば学校という建物、空間を見たときに、お昼の光がサンサンと照っている校舎をパッと見る。そうすると、白く輝いた校舎の建物があつて、それは病院とか、刑務所といったようなイメージで迫ってくる。ですから、そういう違和感のある、そういう空間に対する一つの感受性を和らげるような、そういう方法を大人

は考えると、もしかすると不登校児がうまく学校になじむようなチャンスがあるかもしれないというような、ヒントを与えられたことがあるんです。それと同じことを最初に出会った不登校児について考えました。これは説明すると長くなりますから省略します。

もう一つは、その不登校的な子供と一生懸命にかかわっている、一生懸命という言葉は余りいい言葉ではないんで、余り一生懸命じゃない方が本当はいいんですけれども、チャランポラン、大体僕は人間がチャランポランしていますから、チャランポランにつき合っているんですけれども、そうすると必ず思わぬサインが向こうから出てくる。それはもう劇的なサインである場合がある。

また、これも説明するのに時間がかかりますから、余り詳しくは言いませんけれども、思わぬサインが出てきて、「あつ、そうだったのか。おまえはそういうことを考えていたのか。僕にそういうことをしてほしいと思っていたのか」ということが、あるときパーッと広がるようにサインが届くことがあります、一回そういうサインが読めると、次々読めてくる。相手も喜んで次々出てくる。それで共有する世界がパーッと広がっていくという体験をするんですけれども、そういうことがあった。今から八年前ですけれども、その当時湘南高校というところの定時制の教員を私はやっていたんです。

ちょうど一年生を持つということになりました、一年生の担任団の中心になる。定時制というのは四年間ですけれども、そのときにこれはもしかすると、私は持ち上がり、担任の最後になるかもしれないという予感もしたものですから、かなり不登校の問題について丁寧な実践をして、後、皆さんに伝えられる程度のことをやろうという気持ちがあった。定時制というのは入試のときに面接がありますし、湘南高校というのは実は一二〇人るところに、その年なんかもそうでしたけれども、二〇〇人近い応募者があるんです。八〇人落とさなきゃいけないんです。

普通の定時制だと定数ぎりぎりぐらだから、ほとんど全員入学になるんですけども、当時の湘南というのは、そういうふうになんか非常にたくさん応募者があつた。いろいろ調べてみると、不登校の子供というのは明らかに不利益な扱いをされている。

例えばボーダーラインに不登校児がいる。それから一方普通の子供がいる。普通の子供は中学校三年間一日も休まないで皆勤で来ている。同じ点数しかとれてない、その不登校児は中学校十日間しか行っていない。どっちをとるかといったら、人情としてやっぱり一日も休んでない方をとりたいたいでしょう。だって、定時制に來たつて、また不登校になるかもしれないんだからね。

私はいろいろ考えていたことがあつたものですから、いろんなデータをとったりして、思い切つて、私のクラスに不登校の子供を何人か入れて、どういうふうなことが私はできるかということを試そうとした。一番不登校児の多い班の面接を引き受けまして、私のクラスに数名の不登校児が入つてきたわけです。

いろいろ努力はしたが、もちろんうまくいなくて、定時制に入つてからも不登校になつてやめていった子もいます。成功した子もいます。成功した生徒の中の一人ですけれども、越前君が、きょうこの場所に来ています。私の話が終つた後、直接本人から、定時制高校でどういうふうになつて学校になじめたのか、そのあたりのことを聞いていただければ、一番説得力があると思います。

越前君については、私が余り説明しない方がいいと思いますので、あとは彼にながたいと思います。(拍手)

○林 どうもありがとうございました。

それでは、越前さん、早速ですが、よろしくお願いいたします。



○越前 初めまして、越前と申します。

越前という字は越前岬の「越前」ですから、多分覚えやすいと思います。

初めに、私自身が体験した登校拒否の経過をお話しさせていただいた後に、自分にとって、この登校拒否という体験が、何だったかというか、自分なりに今考えていることを少しお話しできたらなと思っています。

私は、登校拒否を始めたのが小学校六年生の一学期のことです。どういうきっかけで登校拒否をしたかという点、授業中に座っていると、変な気持ちに何かなってくるんです。今も緊張して、手に脂汗をかいていますけれども、そのときもドキドキしてきて、手に脂汗をかいてきて、今にも何か本当に自分がかんがえられないような不安な気持ちに、小学校の六年生の一学期にそういう体験をしました。

昼過ぎになると、結構そういう気持ちもおさまってきて、「あつ、何でもないのでかな」というふうに思っていたんですけれども、何日かこういう気持ちが学校で続くようになりまして、学校に行くと、またそういう気持ちになってしまふ。変な気持ちになっちゃう。何か怖いなというような気持ちから、もう学校へは行きたくないという気持ちになってしまふ。ということがきっかけになりまして、小学校六年生の一学期から学校を休み始めるようになりました。

うちの母親もそんなことが起こってしまったものですから、驚いて、近所のお医者さんに相談に行つたんですけれども、ここで大病院の方を紹介されまして、大病院の方でカウンセリングを受けるようになりました。

小学校の方は、簡単にお話ししますと、その後、行ったり行かなかったりというようなことが続き

まして、何とか卒業をするんです。病院の方も行った行かなかったり、学校へちよくちよく行っていたので、病院の方も何かあんなし熱心に通わなくなってしまつて、中学校に入ると同時に病院の方も行かなくなりました。

中学校一年に入学して、気分も一新して通い始めるんですけど、二学期ぐらいになるとまた休み始めてしまう。今度は別にそういう変な気持ちでドキドキするというのはなくて、何となく学校なんかに行きたくないなというか、何か学校へ行くのがいやだなというようなことになってしまつて、そう思うと、私は結構頑固なんで、学校へ行かなくなつてしまつて、中学一年の二学期ごろから学校を休み始めて、また行ったり行かなかったりという日々が続きます。

中学一年生も何とか進級しまして、中学二年になるわけですけども、ここから私自身も家族も結構つらい一年間が始まるんです。

中学二年に入りますと、もう一日も学校へ行きませんでした。年間の出席日数も多分十日に満たなかったかなというふうに記憶しているんですけども、ずっと家に閉じこもりつ放しで、家から出ると、近所の人の目というのがありましたから、なかなか出にくいということもあって、家で過ごす期間が中学校二年の一学期間は長く続きました。

ここで、このままではいけないというふうに私自身も考えていまして、学校を変えよう、転校しようということを考えました。大阪に親戚があるんですけども、大阪の方の中学校へ思い切つて転校することにしました。そのことを地域の自分の籍のある中学校の先生に相談したんですけども、反対されました。「やっぱり学校は変わってもだめだから」というふうなことを言われました。「それでも変えたい」ということを頑固に押し通しまして、大阪の方に転校することになりました。

大阪の方の学校へ一週間ぐらい行つたと思うんですけども、一週間でやはりだめで、朝起きて、

やっぱりだめだなというか、トイレの中に閉じこもってしまいました、親戚のおばさんもびっくりさせちゃいました、結局、大阪の方も一週間ほど帰ってきてしまいました。

その後、自分の地元には学校の籍がなくて、大阪から籍をどういうふうに移そうかというような話をしていたんですけども、たまたま父親が神奈川県川県の公務員をしまして、そのつながりで神奈川県川県の医療センターの方へ通院というか、またカウンセリングを受けたらどうかということを父親の方から言ってきました、神奈川県川県の医療センターの方へ中学二年の二学期、大阪から帰ってきたころだと思っただけですけども、通院するようになりました。

通院しながら、そこではいろいろカウンセリングを受けたりとか、絵をかく時間とか、ソフトボールをする時間というのが病棟の中でありまして、それに参加させてもらうような形で通院しました。

そこは、全部かどうかわからないですけども、私の場合は、入院して治療をしようということ言われていまして、ベッドを待っている状態でした。それで中学二年の三学期になりました、ベッドがあきまして、入院することになりました。病院ですから、入院すると、いろいろと薬を飲むということも当然あると思うんですが、私自身、確かに学校は行っていないけれども、薬を飲むのとはちよつと違うかなというか、病気ではないなということも自分なりに感じていまして、そもそも自分が病院に入院するというのは、病気でもないのにおかしいなというようにちよつと思ひまして、その医療センターの入院先も一週間ほどで脱走してしまいました。

看護婦さんに「ちよつとマラソンに行ってきます」と言いながら、バス停まで思いっきり走って行って逃げて帰ってきてしまったんです。その後、母親が荷物をとりにいきました。

そんなことが二年生、一年間、大阪に行ったり、病院に入院したりというような試行錯誤がずっと続きまして、その後どうしようかというか、もう本当に家族とも途方に暮れまして、中学三年からは

実は市内の養護学校の一角に通学させてもらうことになりました。

父親と、その養護学校の校長先生にお願いしに行きまして、ぜひ三年生からめんどろを見てほしいというか、ぜひ養護学校の方へ通わせてほしいということをお願いしに行きました。六年生のときに登校拒否を始めたときに、教育委員会の先生に「養護学校に行ったらどうか」というような相談があったことを記憶してしまして、それで養護学校にお願いしに行ったという経過があるんです。

この中学校三年生の養護学校での生活、一年間が自分にとってすごい転換期というか、いい方向へ向かう生活だったなというふうに分なりに考えています。

その辺の養護学校の生活のことをちよつと詳しくお話したらと思ったんですけど、簡単に出来事を幾つかちよつとお話できたかなと思います。

その生活は、私は障害を持っていないんで、養護学校の一角へ通学して、その障害児とは別の行動で生活をします。一日、行つて、先生に記録用紙というのをつくっていただきまして、自分でその日何をするか予定を立てます。何時から何時まではこの勉強をして、何時から何時までは洗たくして、鳥小屋の掃除をしてとか、細かく結構予定を立てるんです。それで帰るときに、それができたかどうか自分で評価して、できなかったのはどうしてかというのを反省するというか、そういった自分の一日の生活を自分で計画を立てます。

そんな生活をしてしまして、夏のことだと思ふんですけど、養護学校ですから、畑があるんです。十メートル四方ぐらいの広さなんですけれども、夏に雑草がたくさん生えていまして、その草刈りをするようにと言われまして、夏の暑い中、半日かけて全部草を刈りました。私にとっては本当に、そんな広さの草刈りをするというのは生まれて初めての経験で、暑い中、どうしてこんなことをしなきゃいけないのかなと文句を思いながらも、何かそういう経験もあります。

あと養護学校ですと、市内に一つということ、かなり家から遠いんですね。それで自転車でも通わせてもらうことにさせてもらいまして、実はその自転車で通学中に自転車が石にぶつかってしまつて故障してしまいました。それを学校へ押していきまして、それを一日かけて修理しました。それを先生は何とも言わなくて、「直るまでやっていいよ」というふうに言っていたきました。結局、直らなかつたんですけれども、乗れるようになりました。

こういう経験は本当に今までの自分がない経験で、すごく今でも覚えています。

それから養護学校ですから、障害児の友だちと一緒に修学旅行へ参加させていただくという機会がありまして、実はその生活が、今度私が就職する就職先が福祉施設なんですけれども、その将来の仕事とつながつたんです。そういった障害児と一緒に修学旅行に行ったということもありました。

それで、養護学校の生活というのを、今幾つか出来事をお話ししたんですけれども、この三年生の一年間、養護学校での生活というのは、非常に自分自身を振り返るというか、見つめ直すというか、すごくそういう時期だったんではないかなと考えています。自分で記録して、自分のやったことを振り返って反省して、その記録の一つの中に、「家族との対話」という欄がありまして、改めて家族とうちでどんな話をしたのかということを書きなさいという指導を受けたんですけれども、意識してやってみると、家で、こんな話をしたのか、自分はやっぱり父親と余り話そうとしていないのかなとか、いろんなそういうことにも気づけまして、すごく自分自身というのを見つめ直せる場だったのかなと思います。

中学三年生ですから、今度進学という問題が出てくるんですけれども、そういう自分を振り返るような生活をしていく中で、自分は本当にどうして学校に行くのか、どうして勉強するのかなということを考えてみたいという希望がありまして、かなり自分の体を動かしてみたい。具体的に言ったら、

働いてみたいな、仕事をしてみたいなという気持ちになりました。仕事をしながら、勉強することが、仕事にどんなふうにして役に立つのかなというのを考えてみたいと思ひまして、定時制高校の方へ進学を希望しました。

定時制高校に入学をするんですけども、中学時代と定時制高校へ行くときの登校する気持ちというのが全然違うんです。どんなふうに違うかというと、中学校まではもちろん義務教育ということもあったかもしれないですけれども、学校は行かなくちゃいけないんだ。必ず行かなくちゃいけない。そういう気持ちがあったんです。定時制高校へ行くときは、さつきも言いましたように、どうして学校に行つて勉強するのかということを考えてみたいという希望がありましたから、何のために学校に行くのかということを考えながら定時制高校へ行きました。そういうふうに登校する気持ちの違いというのが自分自身にありました。

それから幾つか、二年ほど前にこういった機会がありまして、自分の体験をお話ししたんですけれども、そのときに定時制高校の生活がすごく新鮮で、自分にとって何か新しい体験が多かったという話をしたんです。今なんかそれを振り返つてみて、何が新鮮だったのかなというのを考えるんですけども、それは一つには学校に行く意味ということ考えたということもあるんですけれども、一つは、自分の存在感というか、それを実感できたのではないのかなというふうに思っています。

例えば昼間は仕事をしていたんですけれども、職場へ行つて、自分もその職場の人たちから信頼されているし、また、自分もその職場の人たちを信頼していくというか、人と人との信頼感というのをすごく実感できました。学校へ行けば、友だちも自分を信頼してくれるし、私も友だちを信頼するし、私は今までそういう経験というか、親友というのがほとんどいませんでした。初めて定時制高校で親友というものを私は見つけたなという感じがして、そういう人と人との信頼感というのが、

私はこの定時制高校で実感できたのではないかなと思っています。

ちよつと長くなつてしまつたんですけれども、最後に、じゃ、自分にとってこの登校拒否という体験は何だったのかということ很简单に話せたらいいなと思うんですけれども。私自身、登校拒否というのは、確かに学校へ行く、行かないということとはすごく表面的なことで、自分にとっては本当に自分自身を見つめ直して、自分をまたつくっていくというか、新しい自分を築き上げていくような作業だったんじゃないかなと思っています。それが養護学校であり、定時制高校という場だったのではないかなというふうに、自分なりに今考えています。

そういった作業を通して、学校へ行く意味、勉強していく意味を前向きに考えていけるようになってたなというふうに思いますし、人と人とのそういう信頼関係を持つていくことのすばらしさというか、大切さというか、そういうことを実感できたのではないかなと思います。

最後に、きょうはお母さん方が多いのかなというふうに思うんですけれども、うちの母親もすごく十年ほど前はいろいろと、親戚に行けば鋭い目があったりとか、子供ながらに私も感じていましたけれども、どうか本当に登校拒否というものをマイナス面、確かに勉強がおくれたりとか、学校へ行かない時期は友だちとの関係も薄いということもあるかもしれないませんが、それは必ず後で十分取り返すことができるものだと思います。ぜひそれをプラス面に考えて、必ず勉強していくことの意味とか、そういう人と信頼関係を持つていくことのすばらしさというのを必ず何か実感していく体験だと、そう思います。

ありがとうございます。すみません。長くなつてしまいました。(拍手)

○林 どうもありがとうございます。

菅先生、何かつけ加えることができますか。

○菅 越前君もちよつとかたくなっていたところもあって、さつき彼が言った、前にもこういう機会があったというのは、実は藤沢市のある公民館で不登校の話をしてくれと言われまして、そのときに公民館の担当者から、元不登校であったのに、現在は成功して生き生きと生きている生徒さんがいたら一緒に連れてきてくれというので、彼を連れて行ったわけです。二年前の話です。

彼は自分の大学のことは何も言わなかったんですけれども、湘南高校を無事に卒業しまして、卒業するときに大学にも行きたい。それで日本福祉大という名古屋の先の方にある、あそこを受験するわけです。もちろん二部です。昼間は、最初パン屋さんだっけ、アルバイトをやつて、パンをこねて、仕事をしながら大学に行きました。今年がちょうど四年目、卒業なんです。それで今最後の福祉関係のところに就職も決まった。私にとつても自慢の生徒というか、誇りにすべき生徒なんです。

その公民館のときに、きょうはちよつと照れて言わなかったけれども、——言ってもいいかな。——こういうことを言っただけです。

「僕が登校拒否になったときに、お母さんは取り乱して、僕のことをしかったり、怒ったり、泣いたり、ときにはぶつたりした。僕は、お母さんにぶたれたりなんかすることもつらかったけれども、それ以上に僕がとつてもつらかったのは、僕のためにお母さんがそういうふう人間が変わった。それまではとつても優しい自慢のお母さんだったのに、僕が登校拒否になったために、そういうふうに取り乱して、僕をぶつたりするようになったと思うと、そのことがとつてもつらくて、たまらなかった。たくさんさんの登校拒否のお母さん、（きょうよりもっと比率が高いんです。そういうお母さんがほとんどの会でしたからね。）皆さんに言いたいのは、子供が不登校になったときに、必ず子供には不登校から自分の力で回復する力というのがあるんだから、それを信用して、泣いたり怒ったりしないでほしい。お母さんは、むしろ子育ての大部分は終わったんだと思つて、自分の趣味や、それからやりた

いことやなんか見つけて、そういうことを一生懸命やっていってくれば、僕も自分で自分のことは一生懸命考えて、どこの学校に行こうかと考えてやるんだから、そういうふうにお互いに生き方で競い合う。そういうふうにくれくれたら一番不登校児としては助かるんだ」という話を、ちょっと私が粉飾し過ぎかな。言ってくれて、それで参加していたお母さんたちはハンドバックをパチパチあけて、目頭を押さえていたと、そういう情景がとっても印象的だったことがありました。

○林 どうもありがとうございます。

私としては、特につけ加えることはありません。

今の越前さんの話の中に、三人の先生方が話されたこと、すべてが含まれているような気がいたします。

次のスケジュールですが、前半の話はとりあえずここまでで終わらせていただきたいと思います。

これから一〇分ほど休憩をいただきまして、それから後半の話に移らせていただきたいと思います。ご質問、ご意見等ございましたら、どうぞご遠慮なく紙に書きまして、お出しいただきたいと思います。

それでは、前半はこれで終わらせていただきたいと思います。

先生方、越前さん、どうもありがとうございました。(拍手)

—— 休 憩 ——

○林 三人の先生方並びに越前さんの話をお聞きになりました、どのようなことをお考えになったか、指定討論の広瀬先生にお伺いしたいと思います。

では、広瀬先生、お願いします。

指定討論



○広瀬 シンポジストの方々並びに越前さんの話を大変興味深く聞かせていただきました。

ここでは時間が限られておりますので、一番最初の永田先生の話を中心に感じたことや疑問に思ったことをのべてみたいと思います。

不登校の子供に対する教師のかかわり方について、永田先生は、いくつかのポイントについて指摘されました。

一つは、教師の顔で子供に働きかけるといふ、そういうやり方というのは子供にとっては余り意味がない。子供はいつまでも心を開いてくれないということです。教師根性というのでしょうか、教師というのは何でもかんでも子供に働きかけることがよいことであると思いがちです。善意にあふれた熱心な先生ほどいい先生だみたいなことが、この間言われてきました。しかし、そういう姿勢が不登校の子供たちの出現によって崩されたというか、問い直されたということは非常に意味があるのではないかと思います。

次に集団に参加できないのはだめだとか、学校に来ないのは怠けているという決めつけが教師の間に根強くみられたということです。

また、教育は学校でしか行われない、学校こそが子供の発達を保障する場である、という学校信仰みたいなものもかなり根強く残っているということです。

こうしたなかで大切なことは、永田先生のおっしゃったように、教育とは何かを問い直してみることではないでしょうか。

学校の存在を問う、あるいは学校を相対化してみる、このような視点が是非とも必要だと思っています。以上、永田先生の話をお聞きして、私が共感した部分を述べたわけですが、次に二点ほど疑問点を述べさせていだきたいと思っています。

まず一つは、不登校の子供へのかかわり方に関する問題です。今まで不登校児に対する対応の仕方がよくわかっていなかったのが、最近方程式の解のようなものがチラホラみえてきた。つまりどういうことかと言いますと、やたらな登校刺激を加えないということですね。行きたくないのだったら、本人の気持ちを尊重する。ゆっくり休ませてあげるとか、寄り添って暖かく見守ってあげるという処方せんが、行政サイドの方からも出てきている。

現在、文部省や教育委員会が、不登校の問題に対して対策会議を開き、さまざまな答申や報告書を出しています。なかには、不登校の子供にどのように対応したらよいかを記した、いわゆるハンドブックのようなものもあります。不登校児をいろいろなタイプに分け、こういうタイプにはこのように対応せよと、言葉は悪いのですが、かなりマニュアル化された内容になっています。

実は私は今、神奈川県教育文化研究所で教育相談という仕事をやっています。最近、非常に不登校の相談が多いのですが、そこで気づくことの一つは、母親の方がかなり勉強しているということです。「不登校の子供を抱えていて困っている。どうしたらいいのか」と言いつつ、「やはり登校刺激を与えないで、そのままにしておくのがいいんでしょうね」と、こちらが答える前に、対応の仕方を自分から話すわけです。

つまり、子供の対処の仕方みたいなものがかなり一般化してきているといえます。しかし、そこで

いつも感じることは、そのようにマニュアルどおりに登校刺激を与えない方がいいことなのかどうかということです。電話相談を受けながら常に感じているわけです。

例えば中学生、高校生になりますと、親がいくら言っても、教師がいくら言っても行かない子は行かないんで、これはもうある意味では説得というのは無理なわけですが、小学校低学年の場合には、学校に慣れていないという面があつて、逆に言うと、学校に慣れれば、ある程度スーッとそのまま行ってしまう可能性もあるのではないかという気がするわけですね。ですから、「行きたくない。いやだよ」と言つたとき、登校刺激を与えない方がいいのだということでソツとしておくのか、それとも何か手を打つて、いろいろだましだましでも学校に行くようにさせた方がよいのか。そのところでもいつも悩んだりするわけです。

そこで、永田先生にお聞きしたいのは、登校刺激を与えないというように、一律に果して言えるのかどうか。不登校の子供に対して、親なり、教師なりが具体的な場面において、どのような対応をしたらよいのか、その具体的な対応の仕方についてまずお聞きしたいということです。

二つ目は、学校をどう変えていくかという問題です。今学校に依存しない生き方が生まれてきている。これは、ある意味では注目すべき動きだと思います。

ただ、ここで注意しなければいけないのは、それでは学校はどうなるのかということです。学校に行かない方が、極端な話、いいのだというような議論になってしまう場合もあるわけです。

いじめや管理教育にみられるように、学校はさまざまな問題を抱えています。しかし、私は、全面的に学校を見捨てる気にもなれないんですね。今までは学校へ行っている子供がいい子で、学校に行かない子はふまじめで、怠け者だという見方があつた。ところが、不登校の子供が出てくると、今度は逆に、学校に行かない子供の方が、感受性も豊かだし、いろんな生き方が学べるからいいのだとい

う議論も出てくるようになった。

もちろんこの主張には、学校に行っている子はだめなんだというニュアンスは多分ないと思います。ただここで気をつけなければならぬことは、こうした「意味づけ」は必要なのだろうかということです。子供をあれこれ意味づけることにはあくまでも慎重でありたいという気がします。むしろよい「意味づけ」をせずに、学校に行く子もいて当たり前だし、学校に行かない子もいて当たり前、そうしたとらえ方ではないかと思えます。

そこで質問なのですが、学校以外の場での生き方に注目したいということですが、他方では学校をどのように変えていくかという問題が残っていると思います。今、不登校の子供に対する対応は、子供を学校に適応させることを基本にしているように思われます。しかし、逆に学校を子供に適応させるという改革も必要ではないでしょうか。この点についての永田先生のお考えを聞かせていただければ、と思います。

以上、二点についてよろしく願います。

○林 では、永田先生、よろしく願います。

○永田 今出された問題の直接のお答えになるかどうかわかりませんが、私は、現実には横浜の中で相談指導学級という、学校に行けなかった子供たちが集まってくる学級をやっております。きょう、さつき会場からの質問の中にも、私あての質問として、そういう学級をつくり、あるいは不適応指導教室というのもできてきている。だけど、そこにも行けない子供だってやっぱりいるわけです。そういうことをどう考えるかということも含まれておりますけれども、私は、自分でそういう相談指導学級ということにかかわりながら、こういう存在というのは、矛盾した存在だというふうに、私自身が考えております。

矛盾した存在という一言でとりあえず片付けておきたいんですけれども、だから、それを可否を問うと、ある人は必要悪だというふうに言いますし、そういうところがあつた方がいいという方もあれば、そういうことによつてかえつてマイナスが起るというご意見もあつて、私は、まさにそれを、その矛盾を、担当している者と、あるいはそれを監督していく行政が矛盾として、痛みとして、自分の責任として引き受けて考えていかなきゃいけないというふうに思うわけです。

それはもう少し、今の登校刺激ということの關係で考えれば、やっぱりそれも学級であつて、学校の中につくるか、外につくるか、というような問題も含めて、これはいろんな今議論があるんですけれども、どうやつたつてそこには矛盾が出てくるわけです。

その点で、ただし、学級という形をとることによつて、その中で私は学校と同じことをまずやつておりません。やっぱり学校に行けなくなつたことが、学校のその子の体験にとつてどういうつながりがあるかということについては、個々によつてみんな違います。だけど、その子にとってはそういう学校体験の中でいいことがなかつたというか、プラスの体験にならなかつたということがあつたとしたら、それとは違う何か、例えば勉強の仕方でも、遊び方でも、人のつき合い方でも、あるいはそういう中に一人でいるとか、そういうことも含めて、今まで体験しなかつた体験がそこでできたらい。そういう場として、公立学校とか、公共機関もそういう場所を設置するということか、用意する義務はあると思います。選択については、これは開かれて、自由であつたらいいというふうに思っております。

したがつて、今出ましたように、民間でもいろんなことができてきて、これはきのうニュースで取り上げましたように、文部省が、民間のスペースも卒業認定等、あるいは出席のカウントに入れると。そうしたことを初等中等教育局長が述べてしまうと、下の方のお役人さんたちは大変だろうなと思ひ

ますが……。

ボンボン言ってしまったて、後、必ず現場では矛盾が起こってくるんですけども、ただ、そういうどんな子供にも登校拒否になる可能性が起こるとか、文部省がそういう見解をこのごろ出してきたこと自体については、これは一つのディスカッションとして、大事な意味があるというふうには私は思っておりますけれども、現場ではそのことが必ずしもプラスに働いていないということは起こると思います。

これからますます矛盾は深まると思いますが、いわば私ははっきり言えば、そういう意味では手を汚していると思います。手を汚さないで、評論をしたり、コメントをすることはたやすいことだと思います。

十何年前、テレビ朝日が「世界の学校」という特集をしていた中で、これは世界のいろんな学校や、いろんな教育の場所の紹介をしたんですが、アメリカのある公立の小学校の校長先生の話が非常に印象に残っております。

その小学校には、普通の学級とオープンシステムの学級と二通りあるわけです。

その校長先生は、「私は、個人的にはオープンシステム、オープンスクールには反対である。しかし、それを求める親や子供たちがいる限り、私は、それをこの学校の中に設置していく」。

その中で、どっちを選ぶかとか、ある時期になってどっちへ入っていくかということも、自由は保障されているわけです。乗りかえていくことは。だから、小学校の五年生まではオープンでやったけれども、中学進学を考えて普通の学級に入っていくということも認める。デモクラシーというか、民主主義ということの根幹にかかわる問題だと思います。

そういう制度の上のことでは、日本では、一つの制度をつくると、それが画一化して硬直化してい

く。私は、実は、二十五年ぐらい前にこの仕事を始めていて、そのころは全く孤立無縁で、何をどうしていいかわからなかったわけですが、やがて日本にも登校拒否になったら、今さっきマニュアル化とおっしゃいましたけれども、そうしたらこういう子たちにはこういう課程をつくって、こうやっていけばこうなるというシステムが完成するときがくるだろうということを、二十年ぐらい前に予感をしておりました。

不登校がふえたことによつて、今まさにそのことが起こっている。とすれば、今やることは、そのことをもう一回考え直して、片一方では新しいものをつくりながら、片一方ではそれを否定していくという大変矛盾したことを、私自身も毎日やっているものですから、どうもこのごろよく眠れなくて、どうも朝起きぐあいが悪くて、胸が気持ちが悪くなって、さっきの越前君のような体験を毎朝して、毎朝、学校に休むと電話しようかなんとか、もうすぐ私は不登校になる直前で、実は三月で退職になるといふ、こういう形のチャンスにめぐまれております。いわば、そういうことで学校体験、それも特に今までしなかった違った学校体験とか、これは広い意味での民間の中の場面も含めて、子供の世界がとか、体験が広がること自体には、何かもつといろいろな手だてが必要だろうと考えております。

○林 どうもありがとうございます。

今、広瀬先生の方からお話が出ました、登校刺激の問題について、竹内先生はどのようにお考えでしょうか。よろしく願ひいたします。

質疑の中で

○竹内 登校刺激を控える、ゆっくり休ませてあげる、これはマニュアルの形で普及されつつあります。むしろ普及しすぎのところもあるような気がします。ここでいうマニュアルは指針というようなものです。将棋や囲碁で例をあげれば定石ということであって、実践ではそれはひとつの手がかりにすぎないということです。実際に押しついたり、心の裏打ちのない指示では大変危険に思えます。大人が一生懸命に考えていく過程で、その際の一つの判断の素材として用いるといった、心のこもった指示が必要です。そうでないと登校刺激を控えるという錦の御旗になって、子供との関わりの面倒くささの隠れ蓑になってしまう場合も起こってしまいます。つまり心のケア、関わりにおいてはお風呂のほど良い温度と同じだとしばしば言われます。熱すぎても冷たすぎてもいけない。その中間のほどほどの適温がよいと。私たちプロはその調整をするためにいるのです。マニュアルや機械的にはこなせないわけです。

次に指示にどのようなメッセージを託していくかという話しをします。ゆっくり休みなさいという指示は、当の本人である子供には意外に難しいものです。医者の指示でゆっくり休みなさいと言われても、病人はあれこれ考えてしまいます。将来の事、家族の事など。病気を素直に受け入れる、あるいはゆっくり心身共に休めるということはこのように簡単なようで難しいことです。その辛さを判らないで指示を出したら、全く心がすれ違ってしまいます、そのような不安を含みにして教育的な方針を出していただきたいと思います。「ゆっくり自宅で休みなさい」という先生はお見舞いの手紙

や、家庭訪問などで、こちらが本当にゆったりした安定した気分で出会えるように心がけるといことが重要です。つまりメッセージにはこちらの気分を託したいものです。

この機会に学校に望む事を言わせていただきます。

第一に学校に対して何が望まれているかという事を具体的に考えていただきたい。子供のニード、親のニード、地域のニード等、生の声を学校はくみあげていただきたい。医者も教師もある意味ではサービス業というのが私の持論ですが、その意味でも私たちが子供たちに何を与えられるかというのではなく、学校へのニードにどのようなようにお答えしていくか、何が期待されているのかということです。これは不登校の家庭訪問の際にも肝心なところです。とりあえず何をサービスできるかといった姿勢です。

次に大人自身が学校という職場を楽しいところにしていかなくてはいけないという努力です。小児精神科の入院治療でも同じ事がいえるのですが、大人の背中を見て子供たちは、そのエネルギーをもたって生き生きしたり、考えたりするわけです。学校全体で職員同士が思いやる、いたわりあうという姿勢をまず優先したいと思います。

予防の事にも簡単にふれさせていただきます。時間の関係で五点だけ話します。教師はとにかく子供を見てください。一人一人の子供の顔を見てください。四十人全員の子供の顔を見られるということは日常的には至難の技です。そのようなときは自分が今見られていない子供は誰かということを認識していただきたい。とにかく一人一人を見ていただきたい。普通の子供でした、というのは答としては少しさびしい気がします。「どのような子供でしたか」という質問に対して、一枚の紙に記述ができるようになっていただきたい。それには関心をもつての観察、ひたすらラベルを貼ることなく見ていただきたい。

第二に心の「ひび」の予防のために、その子供の甘えかた怒りかたに注目していただきたい。依存や攻撃をどのような場所で、どのような人に行っているのかなと思ひめぐらしていただきたい。甘えに關しては甘え上手なのか、下手くそな子供か、怒ることに関してはどうか。愚痴や問題を起こしている子供はある意味では周囲の関心がいくらかでも引き寄せられているので幸せです。そういうことを何もみせずに、大人のように一人で頑張っている子供はその不自然さが少し気にかかります。

第三に子供の表現を育むことです。言葉だけではなく絵でも音楽でも運動でもいいのです。感情が伝えられる術がもてればよいのです。表現できる子供は、いろいろな心のストレスも乗り越えることができるのです。先ほどの越前君のお話しをうかがっていて、このように言葉で表現することによって過去の苦しみ乗り越えて、立派にたくましく成長されているんだと思いました。言葉を探す、あるいは表現することによって、自分に新たに気づいていけるのです。表現できる子供は放っておいても大丈夫です。表現が苦手な子供に、表現できる術、あるいはその子供にあった表現の型と一緒に探して育てていただきたいのです。

第四に子供にいろいろな経験と出会わせていただきたい。先生や大人自身にもいろいろな経験があつてほしいと思います。例えば普通学級の先生は養護学校をあまりごぞんじない、あるいは通信制や定時制の先生との交流は意外に少ないのではないのでしょうか。教師の二ヶ所の集まりに私自身参加させていただいています。いろいろな教育や社会にであうことは私にとっても素晴らしい経験です。子供自身にも例えば障害の子供たちと出会うことをぜひさせたいものです。その障害に關して大人は「大事にしない」とか余計なこととは言わないで経験させ、表現させていくことが大切です。いろいろな生き方を知ることには生きる意味で大きな励ましです。ある不登校の子供が「高校へ進学できなかったら、この世の中は生きていけない」といった思いこみはそれまでの経験の乏しさにも原因がある

のです。

最後に予防のポイントとして、子供たちの良いところやほめられるところを大人たちがどの位数えられるかということです。そのためにも第一番目にあげた観察が重要になってきますが、目の前にいる子供の良いところを五つ位あげられるかどうか。自分のお子さんの場合はどうでしょうか。「悪いところ、注文したいこと」このほうが容易に心に浮かんでしまう大人も多いかもしれません。

しかしプロはここを乗り越えなくてはいいけません。誰からも嫌われて相手にもされない子どもというのも現実にはいるのです。その子どもたちにもお世辞ではなく、ここから良い点を認められるかといった問題です。

そのことと同時に、子供が社会的に、あるいは人のために役にたつ喜びというのか、自分だけのことで喜ぶのではなく、その子供の存在が本当に生かされる、社会の中で認められる、そのような経験はさらに深い自信につながると思います。

以上のことを心の健康の予防というポイントとして申しあげました。

○林 どうもありがとうございます。

それでは、菅先生、菅先生あてへのご質問等を踏まえまして何かございましたら。

○菅 私にというのはなかったのでもいいです。お集まりの皆さんから、越前君に対する質問もあるんじゃないかと思うから。

○林 今、菅先生から、ご提案といいますが、進行上のお話がございましたけれども、実は、フロアの方からご質問いただいたもので特定の先生の名前がないのは、みんな私のところに参りまして、ここに大量にたまっているわけです。それで、その紹介もさせていただかなければいけないので、ちょっとだけそれをやらせていただきまして、それからフロアとのディスカッションに移らせていただき



たいと思います。

まず、具体的に不登校のお子さんを抱えているお母様お二人、つまり、小学校二年生の方と、高校二年生の方ですが、具体的な相談をしたいということだったんですが、これはこの会ではなかなか難しいと思います。

私どもの神奈川県教育文化研究所では、相談室を開設しておりますので、そのパンフレットはありますでしょうか。——残念ながら、今置いてないのですが、電話番号はわかっているはずですので、その電話番号は係の者が後でお教えいたしますので、よろしかったら受付のところに個別にお寄りいただければ、その電話番号はお知らせできると思います。お二方、そういう質問がありました。

それから、これはかなり重要な問題で、一部は広瀬先生の指定討論の中にも含まれていたことかと思えますけれども、これは親御さんの方からの質問なんです。『きょうのこの話をお聞きになられた現場の先生、小学校、中学校の感想を、親の立場で伺いたい』。そういういわば挑戦的といえますか、それは

ちよつと言い過ぎかもしれませんが、そういうご意見が出ておりました。

先生方も何人もいらしていると思いますので、フロアとのディスカッションの時間に、挑戦という言葉の適否はともかくとして、先生方なりのお考えを示していただければ思っております。

それからあとは、永田先生が行われているようなお仕事というのは、横浜以外でもあるのかというご質問がございましたが、この点についてはいかがでしょうか。先生、ちよつとお願いいたします。

○永田 今、県下では五、六カ所、各市に相談指導学級というのは設置されておりますが、システムや受け入れ方等についてはかなりいろいろあります。残念ながらよくあることは、そういうところに設置されない地域の方からは、横浜に入れないのか、そういうことがありますけれども、これは各教育委員会でそれぞれに対応しておりますので、そこにお問い合わせください。

ディスカッション

○林 それではフロアからどうぞご自由に発言いただきたいと思います。

ご意見、あるいはご質問等ありましたら、どうぞ、マイクが中ほどに用意されておりますので、お手をお挙げになつてご発言いただきたいと思います。そのときに、一応立場といいますが、親の立場、あるいは教師としての立場などを簡単にお話しただければと思います。

手を挙げられた方、どうぞご発言ください。

○——冒頭に教育部長さんからもちよつと触れられました、相模原の相談指導学級というところにおります中学校の教師です。

結論から言いますと、大変身につまされる思いで、五人の方のお話を聞かせていただきました。

実は、私自身、現在の学級に来る前、当然、通常学級、普通の学級に十数年いたわけですが、今思うと、半分は自戒の念なんです。結果的に大変子供に管理的にやってしまったというか、いや、もっと正直に言えば、個人的には非常にそういう厳しい押しつけのような指導方針には疑問を感じてはいたんですが、やはり振り返ると、自分もその中の一員になってしまっていたということが一つ感じます。

そして、その前の学校の中での終わりから二年目のときなんです。持ち上がりではなくて、残った三年、二年間続けて三年を持った、その二年目の子たちに実は一年近くずっと反乱をされたんですね。主に女の子たちだったんです。それは今振り返っても、どこに問題があったかという、もちろん自分の指導も問題があるんですが、その子たちが、もう二十歳過ぎていますが、今でも私にこう言ってくるんですね。言葉は違いますが、「やっぱり受けた体罰と、納得のいかない指導ということはずっと



今でも傷に残っている」というふうに言われている。

私はそれを聞いて、改めて学校というところはもともとと、本気で子供に目を向けていかなければいけないということを感じました。

ごく最近あるお母さんから聞いた話では、これは本当に一例だと思うんですけど、「うちの子は学校で絶対に水泳をやらない」と言うんです。なぜか。なかなか言わなかったんですが、実はやっとある時期になってしゃべったのは、「僕は、あの水泳パンツの形がいやだ」と言ったそうです。学校によつて多少違うかもしれませんが、割と男の子の水泳パンツって、学校で指定するのは、かなりハイレグじゃないんですけれども、「その形がすごくいやだ」という男の子もいるんですね。思春期ですから、そういうことを大事にする。

だから、民主主義というのは、思想信条の自由だと言うけれども、思想信条の自由の中に、感じ方の自由ということも本当に大事にしないてはいけないというふうに思っています。

ただ、そういう経験を通じて、現在、相談指導学級に身を置いている私ですが、やはり竹内先生のお話でも感じたんですね。あるいは永田先生のお話にもあったかと思っています。

結局、善意でやったつもりが余計なことを言っちゃったんだなんていうことを、今ハツとして話を伺わさせていただきました。

それから、子供を多面的に見る。いろんなところから理解するということでは、私の学級を訪ねてこられる方がいろいろいます。先生方やお母さん方や、あるいはいろんな教育関係の方々が見えますが、多くの方が共通して言われるのは、「本当にこの子たちが登校拒否なんですか」ということなんです。一番驚かれるのは、前の学校で担任だった先生だと思っんです。「あの子が何でこんなに生き生きしているんですか」と言われて、やっぱりそういうところを考えますと、本当に子供というのは学校

で普通に見せる姿というのはごくごく一部なんだなということを感しました。

それからここにはお母さん方も多いと思うんですが、私は、何年か今の学級にいてつくづく感じることは、本当に立ち直るということは、外で見ただけでは判断できないと思います。私の学級で言えば、進路ということがきつかけになって、それがエネルギーになって、一生懸命勉強して、それから生き方も新しい生き方で力をつけて巣立っていく子もいれば、進学できた後で再び登校拒否ということもあるし、時間的にはそこまでいかないで、進路が十分に煮詰まらないで卒業していくという子もいます。

でも、少なくとも、子供たちは間違いなくお母さんやお父さんから愛されているんですね。それだけは子供たちはわかっています。だから、大きく転落するということは、まずほとんどありません。在学中に性非行に走った子も複数います。女の子でいます。でも、その子供たちは今立派に生きています。

ことしも間もなく卒業式を迎えますけれども、顔つきがグングン変わってくる。そうやって巣立っていく子供たちを見ていて、私は、本当にやりがいを感じています。

先ほどのどなたかの質問に答える形で、永田先生はお話ししていました。私ももしかしたら相談学級はない方がいいと思います。でも、現実には今動けない子がいて、その子供たちにとって、そういうドラマが幾つも生まれているとしたら、私は、矛盾していますけれども、一日も早く相談指導学級のような施設がなくなることを願いながらも、やはりその子供たちと一緒に、その子の人生を一緒に考えていきたいというふうに考えています。

以上です。(拍手)

○林 どうもありがとうございます。

他にご意見、あるいはご質問等ございましたら、どうぞご遠慮なくお願いしたいと思います。ディスカッションの時間は若干ございますので、どうぞ余り時間のことは気になさらずにと言うと言い過ぎなんですが、ご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

○—— 越前さんのお話が一番いいんで、越前さんに。

○菅 どういう点についてもう少し。

○—— 大学ですね。

○林 それでは越前さん、よろしくお願いします。

○越前 何でもいいですか。そうですね、高校時代にいろんな人と出会って、信頼関係を持てたという話をしたんですけれども、父親との関係というのが中学時代、どうも父親とうまく話ができなかったということがありました。先ほど養護学校のときに記録を書いたというふうに言ったんですけれども、それをきのう見ていたんですけれども、やっぱり父親と関係がうまくいっていないということが、どうしても父親が私を避けているようなところもあったし、私も父親を避けているなということがあって、結構そういう記録がきのう読んでいると残っていたんです。

定時制に入って仕事をするようになって、いろんな働いている人を自分も目の前で見て、自分も働いてみて、そういった外の人との信頼関係というのもそこですごく体験できたんですけれども、初めて働いている父親というのを高校時代私は見ることができたのかなと、すごく感じています。

ですから、最近、今、愛知の方に行って、たまに藤沢に帰ってきて、父親と会ったのが一番楽しみです。高校で働いて、外の人いろんな信頼関係ができたということもよかったんですけれども、父親との関係も、働くことで何か父親の存在というのが改めて自分も実感できたということが、すごくそういう意味でも働けたというのは、私はよかったなと感じています。



受験のこととか、結構あると思うんですけど、私は大学は今二部なんですけれども、一般入試で入っていませんで、社会人入試というのがありまして、定時制高校へ行っている人とか、あるいは一度社会に出た人のための入試というのがありまして、それを使って入りました。結構そういうところが最近ふえているかと思うんですけども、そういうチャンスも利用してみたら、またいいんじゃないかなというふうに思います。

以上でいいですか。

○林 どうもありがとうございます。

ほかにご質問ございますか。特にございませんようでしたら、菅先生に少し伺いたいんですが、先生のお話の中に、「この子がこんな立派な青年になったのは、一度も学校に行かなかったからではないか」というようなことがあったかと思えます。もちろんこれは文学、創作上のお話ですから、実際には先生は教育実践をずっとなさってきたわけで、決して途中で逃げたわけでも何でもないと思いますけれども、現在の学校にもし何か先生として注文され

る点といえますか、望む点というか、それがございましたら、ぜひそれをお願いしたいと思います。
○菅 もう既にパネラーの先生たちが学校についてはいろんなことを言っているしやるので、私はちよつと角度を変えて、不登校的な気分から学校に対してかなり強い関心を持つに至った、そのきっかけについて話したいと思うんです。

制度としての学校、例えば先生がいて、建物があつて、教科書があつて、それから授業があつて、というようなことって意外と大したことないんだと敗戦の前後から私は実感するようになりました。つまり、そういうこと以外に学校というのはものすごくメリットがあるんだ。行ってみると、広い空間があつて、そこにたくさん自分と同じような年齢の友だちがいて、それで何か適当なことをやろうと思えば、結構適当なことができる設備がある。その上公立の小・中・高であれば、お金も比較的安い。

つまり、何かそういう払っているお金に比べて、実際に自分がその気になれば、そういう制度としての学校以外に随分いろんなことができるんだということを、ある時期、私は悟るんですね。それがちよつと登校拒否から回復した時期と非常に重なっている。

中学の二―三年ぐらいからそうだと思えますけれども、それが上にいけばいくほどそういう自由度が自分の中で高くなっているって、例えば大学のときは、私は理学部の物理学科というところを出まして、物理の先生になつて、実際物理を越前君にも教えてきたわけです。でも、例えば大学のときに何にうつつを抜かしていたかという、実は学生演劇なんですね。学生演劇の作家だったわけです。

それで卒業して、何年かたつて岸田戯曲賞なんでもらうわけです。そうすると、大学の物理の学生である自分と、学生演劇の作家であつた自分とを考えて、その後の三十何年の人生、例えばそれは大部分は教育に費やしてきたんだけど、それにとつてどつちが意味を持つかというと、圧倒的に学生



演劇の作家ですね。物理の先生なんていうのは、大学の物理を出るということは、資格は確かにもらいました。それがなきゃ教えられないんだけど、だけでも、それは私は高校時代に物理や数学が得意だったわけだから、そのレベルの知識で十分高校生の指導ぐらいできるわけです。大学の物理学科をやったからといって、それがえらい今の高校生に教える物理にプラスになったかというと、そんなことはないんで、少し頭のいい高校生の優等生が同級生を教える方がはるかにうまいかもしれない。

だけど、学生演劇で実際に自分が作家で、みんなと一緒に作品つくって、演出して、上演してきたということはかけがえないことで、その後の三十何年の高校教師の中で、何度も何度も私は生徒たちと集団創作、創作ミュージカル、そういうことをやってくるんですけども、そういう営みができたというのは、それなしに考えられないんですね。

そうすると、結局、学校というのはいさうふうに分たちの方が、制度としての学校を利用しながら自分たちの人生の学校をつくるんだと。どうもそれが

ポイントだ。そのことが実感できれば、不登校だとか、何とかという気分は全部吹っ飛んで学校が楽しくなる。

多分、越前君も、そういうふうに私に言われれば、なるほどと思う節もあるんじゃないか。私はあなたを観察してひそかにそう思っているんですけども、どうですか。いや、答えてもらわなくてもいいけれどもね。彼が伸び伸びしたのは、彼の中でそういう気持ちの変化があったんだ。定時制の中でそういうことがあったんだろうというふうに想像します。

○林 どうもありがとうございました。

閉 会

○林 若干時間は超過いたしました。シンポジウム「不登校をめぐる」、さまざまな角度から貴重な論議が伺えたと思っております。

教文研といたしましては、最初の教育シンポジウムということになるかと思いますが、不登校の問題というのは、一度のシンポジウムで終わるといって性質のものではないと思います。今後このような機会を設けて、さらにさまざまな角度から検討を加えていきたいと思っておりますので、皆様方もぜひ積極的にご参加いただくことをお祈りして、今回のシンポジウムは一応お開きということにさせていただきます。

先生方、越前さん、どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 本当に第一回目のシンポジウムなんですけれども、こんなに大勢の方に集まってもらいま

て、また、神奈川県下の親の会の方も多数ご参加のことで非常にありがたいと思います。

きょうは、たまたま二月二十九日に行ったんですけれども、別に今後も四年に一度しかやらないということではありませんので、来年度からも回数をふやしていきたいと思っています。

きょうのご感想がありましたら、受付の方に袋を用意してありますので、入れて下さい。

また、ここにいらっしゃる先生方の半数以上が県の教育文化研究所の教育相談にかかわっておりますので、詳しい相談事がありましたら、ぜひ相談室の方にお電話下さい。

では、本当にきょうはありがとうございました。

再度、壇上の先生方に拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

気をつけてお帰りください。

参
加
者
感
想
文

☒ 不登校をめぐる、根本的な子どもの立場になって考える一時があつてよかったと思います。目に見える部分でとらえがちですが、見えない心の部分に焦点をあてられた話など、また、実際に不登校になった人の話など興味深く聞けました。

☒ 大変アットホームな雰囲気の話がすすんでいました。越前君の登場もよかったと思う。ご苦労様でした。

☒ 色々なご意見を聞かせていただきとても良かったです。お話を聞いた時は、そうなんだ、もつとそのままの姿をうけいれてやらないと思うのですが、毎日顔を見てみると、気にさわることも多く、ついつい私の方が不機嫌になってしまい、深く反省しています。

☒ 小学校の養護教諭です。学校現場では聞きにくい(?)お話を聞くことが出来て、大変勉強になりました。今日のお話では、「学校に行きたくないなら行かなくてもいいじゃないか」というようなことがありました。私が母親になり、自分の子どもがそうなった時は、そう考えるかな(そう考えるだろう)と思いました。やはり学校現場にいて、今の立場でそう考えることは少し逃げているのかなとも思います。不登校の子どもにはお話のあったように接しても、私としてはやはり「なぜ学校に来れないのか」を真剣に真つ正面から子どもとつきあい考えていかなければと思っています。

☒ 自分の教育のあり方を深く考える機会になった。特に竹内先生の話には説得力があつた。私たち教師は、このような話を聞く機会が多ければ多い程、毎日の教育実践をふり返ることになると思う。でも、自分やまわりにいる教師を責めてばかりいる必要もないと思う。竹内先生の言われた「子ど

もを見る」という作業を私たちは決して怠ってはいないと思うから……。

☒ 今日は、お疲れさまでした。

・相模原でやりながら、相模原の動員が少ないように思う。

・会場内のキーンという高音が耳ざわり、マイクの調子が悪く聞きづらかった。

しかし、すばらしい先生方のお話を聞けて、いい勉強になりました。本当にありがとうございます。またこれからもよろしく願っています。

☒ 来年度より永田先生と同様の仕事をさせていただくことになりました。自分自身、小中学生の頃より漠然と頭の中にあり、教師を志し、不登校といわれる子どもたちと関わっていきたい、一人でも多くの子どもに小さな喜びを沢山味わえるよう手助けしたい、という気持ちで、十年目にして実現できる状態になり、結局は実践していかないと見えないと思いつつ情報が欲しく参加しました。教師然としないで、同じ土俵で理解を深めたいと思います。私も中高校時代に登校しなくては息抜きをした（単発ですが）一人です。誰もが表出度合いが違うものの、覚えがあることと確信しています。ありがとうございます。

☒ 不登校の子どもたちと関わっている者の一人として、竹内先生の精神医学の立場からのお話に納得できる部分が沢山ありました。越前君の話の中には、子どもたちとお母さんたちと一緒に過ごす中での自分自身を問われるものが沢山提示されていたように思う。

・今日の案内のチラシを頂いて、シンポジストの人達がどうして先生（教師、医師）ばかりかな？という感じがしました。不登校の子どもたちに、学校以外で関わっている人たちの話から、違った側面を考えるのもよいのではないかな。

・永田実さんのおっしゃるように、公・民間問わず、子どもにとってよい場を作っていきたいと思い

ます。

・会場からの質問の機会がなかったのは残念。

☒ 勉強になりました。また参加させて頂きます。(教師)

☒ 小六の一学期、坐っていると変な気持ちになってくる——と自分のことを語ってくれた越前君もそうだが、人のことをせめない、変な気持ちにさせる教師やら学校があるのに、決してそれをせめない、その事実にもいつも心を動かされます。私自身横浜の相談学級を担当していますが、子どもたちの生き方に心うたれます。学校での評価はほとんど「1」の中で、自分の進路を決めていきます。真剣に、深く生きている子どもたちに負けられないと思っています。何をしているかなどといわれると、何も答えられませんが、子どものひたむきさを、学校現場にどう返していくか、考えていると思っています。

☒ 今日はありがとうございました。不登校の子、そうではない子、どの子にもその子一人一人を認める、寄り添うことの大切さを学ばせて頂きました。親の生き方が問われる(頭の中ではわかっているつもりなのですけど)時間でした。

☒ 大変よい内容であったと思います。パネラーの方々の選出も適切であった。次回も楽しみにしています。

☒ 特殊学級の教師をしておりますが、自分の子供の同級生の親御さんや同僚からの相談を受けることがあります。今日のシンポジストのお話をぜひ聞かせてあげたいと思います。(今日は都合がつかなかったので)「学校に行くことが立ち直る」と考えていた認識を変える、とても有意義な半日でした。ありがとうございました。

☒ 相模原で親の会をやっています。越前君のお話、とても希望をもたせてもらいました。竹内先生、

菅先生、永田先生、皆さんの「心の健康が傷ついた」人たちへの暖かい眼差しを学ばせて頂きました。世話人として、暖かい眼差しを忘れずにいたいと思います。

☒ 四人のシンポジストのお話は、どれも（教師として）身につまされる思いで聞かせて頂きました。多くの先生方に聞いてもらいたいと思いました。

教組としても、ぜひ継続的なシンポジウムや討論会、学習会などを父母とともに、きめ細かくやってほしいと思います。

運営上のこと……四人のシンポジストの話のあと、休憩の後すぐに質疑にはいって、より多くの人との討論をした方がよかったと思う。ややまのびの感あり。

☒ 本日講演の先生方は、児童に対して非常に理解のある方々だと思います。学校の先生方が、このような認識であれば、不登校になることもないと思います。うちの子の小学校では、給食から忘れ物をしないことにいたるまで、不必要と思われることまで競争の乱用で、児童にとって居心地のよいところではないようです。子供の訴えも教師の態度や教育方針に関することばかりです。つきましては、学校の現場の教師の方々にもこのようなシンポジウムに参加して頂き、理解ある先生方の考えを聞いてほしいと思います。

☒ 三人のシンポジストの専門の話、また実際に不登校になった方の事例を聞くことにより、我々大人が広い心をもって児童に対応していかなければならないことを痛感しました。

☒ 今日、たまたま着席したすぐ近くに、大変さわやかな雰囲気を感じられる青年がいました。その方が後で紹介されお話を伺った越前さんです。何も語らなくても「さわやかさ」をかもしだす人って今までそんなに出会ったことがありません。人間が人間らしく育つことができにくくなっていく世の中です。自らを育てていくきっかけとなる人との関わりや、いろいろな体験の場を作る重要

さを強く感じました。シンポジストをはじめお話をくださった先生方のメンバー構成もよかったと思います。とてもいい時間でした。ありがとうございました。

☒ 越前さんへ

思い出したいくないとても苦しいことをお話を下さってこんなにうれしいことはありません。参加して本当によかったと思います。

中学校の養護教諭です。不登校の生徒も多数おります。また、回復され高校や社会に出て元気に働いている方もおります。その子たちに「どうしてなの？ どうしてだったの？」などとあつかましくは聞けません。こんな形で思い切ってお話を下さってありがとうございます。どうぞこれからも今のままの越前さんでいらしてください。

☒ 越前さんの体験を通して、自分が単純にイメージしていたものと大きく異なることにびっくりしました。生半可な知識を持っているだけの関わりがどんなにまずいものであるかを知らされ、自分の思考の転換が最大課題だと痛感しました。

☒ 今日は、不登校の生徒のお母さんと息子（四歳）と三人できました。いろんな話を聞かせて頂き、ためになりました。「予防」という言葉が頭から離れません。どうしたらそうできるのか、現場の教師は悩みますが、彼（体験した越前君）に励まされているようにも（ガンバレヨ）思います。でも子どもにどう伝えていったらいいのか、ガンバリが負担になってしまっているのではないか、とも思います。「教師なんて」と思っやめるのは簡単ですが、やめてはやっぱり意味がない。今の時代教育現場で、そういう矛盾だらけの中でどういう教師であるのが必要なのか、今日のシンポジウムで少し教師の安らぐ「時」があったような気がします。ありがとうございます。

いろんな人たちに、今日の話をしたいと望みます。不登校の親・教師だけでなく。

☒ 登校拒否の経験者本人から、その時の心情や当時の親に対しての気持ちや聞いたのは、全く初めてだったので、とても参考になりました。これからも、もっといろんなタイプの登校拒否・不登校・怠学の経験者自身の話を聞きたいと思う。私自身、親として我が子が学校に行かなくなった時、とてもあわててしまい、自分の仕事（教師）もあるしということで、何としても子供を学校へつれていこうと、たたいたりおこったり、口ぎたなく言ったりしました。しかし、それがかえって良くなかったと今になって反省しています。（長引いてしまい）一年生入学まもなくから、六年生、今年卒業しますが、まだ続いています。

☒ 不登校を始めた児童を持ち、子ども・親とかかわりを持ちながら悩んでおります。（子ども自身の悩み・苦しみにはとうてい追いつかずですが）そんな中で、自分が考えたり思ったり行動していたことが、実はまさしくやってはいけないことばかりだったと、思い知らされ、グサツと心につきさりました。今後、どのようにしていったら良いか、手間どっていますが、とにかく、また子どもを中心にすえて、力をそえてあげられるようでありたいと思っています。（一教員）

☒ 現在中三（女子）、中一秋から登校してない。学校からはほとんど連絡はありません。よくわかっていない学校から何かうるさく言われるよりまだましと親は考えている。娘は何も言わないがさみしいと思う。担任の先生は、かわるには時間が足りない（忙しい）と思われているかもしれない。子供の言葉で言えば「わかるのが怖いからわかってほしい」（先生に対して言ったものではありません）のかもしれない。

学校に行かないことイコール（×）から始まっているので、先生とじっくり話したくても、接点が見つからず、お互いにヘラヘラして終わり……のムナシイ関係。卒業に際し、何か形のあるもので成長を表わさないと留年（卒業させない）と言われた。何か、とっても変ですネ。子供本人のこと

を真剣に考えてくれるの？教育ってなに？と思う。うちの子とつき合ってこらん、素晴らしいですよ。確実に成長しています。

相模原で、このようなシンポジウムを開いてくださったことに感謝致します。

☒ 小二の男の子が不登校をしています。甘ったれですが、親にべったりという程でもなく、ただ、はつきりと答えがないと納得できないところがあります。学校へどうして行かなくてはならないのか、なぜ勉強を学校でしなくてはいけないのかと、みなで同じことを同じようにしなくてはならないことに対する疑問を、小二の子がわかるように説明できない親としては、子供の成長を待つだけです。個人個人のケースバイケースですが、まわりに対する子供の盾になっている親としては、強いお話でした。

☒ 私は、川崎市の小学校教員であり、また、中一の半年間不登校し、その後相談指導学級から今年巢立ち、単位制高校に合格した子供を持つ母親でもあります。二年前のその当時と比べても、ずいぶん、教文研のような官立(?)の相談機関も意識が変わって来たようです。不登校児が増えてきた社会状況からそうならざるをえなかったのでしょうか……。でも、教育を日々行っている学校現場は、いまだに意識変革が来ていません。特に母親が何か言ってくれば強固な壁を築くのが学校です。私は、自分の勤務する学校で、教師たちの偏見の中でたたかっています。また、行政の方たち遅れが残念です。相談センターのカウンセラーもいろいろな考えの方がいらっしやるし、教師の関わりも非常に下手です。いま、もつとも正しく不登校をとらえているのは、不登校児の親たちです。もつともつと、母親の声に耳を傾けるべきです。

☒ 小学校五年生の三学期から不登校になって今年一年。この頃はすいぶん元気になり休み始めた頃のことをポツリポツリと話し始めました。その中に、担任の先生からの自分を認められなかったこ

とが大きなショックだったことを言っています。社会での一番初めに会おう方が先生ということを考えると、お互いに理解しえなかった人に出会うのは大きな不幸だと思います。

いつも思うのですが、このような場に参加するたびに思うのですが、我が子の学校の先生方も、このような所に参加し、私達のような子供達に手を差し伸べて下さればいいのにと思うのです……。養護の先生に、先日雑誌「こみゆんと」を差し上げたら「このような本を読むのは初めてなんです！」なんとおくれていること。担任の先生は、「進学は無理でしょう」ばかりを言います。もっと、子供の未来を見てほしいと感じて、残念です。身近にこのような先生とお話できる機会があればいいのですが。

☒ さまざまな立場からの意見がとても参考になった。またこういう試みを行ってほしい。

☒ ついつい目先のことにとらわれすぎていたことを知りました。日頃の対応の仕方を大きく反省しています。今日の企画、本当にありがとうございました。

☒ 最後の菅さんのコメントにもありましたが、えーとボクは現役の不登校児（とよばれている）でございます。ボクとしては、学校を交流の場として利用（というと言葉がキツイのですが）したいと思っています。なにしろ、あれだけの場所や人の集まる機会はなかなかないと思いますから。ところが残念なことに、そのせつかくの場所はどれも閉鎖的なようで、ボクが相談指導学級を、自分のやりたいことのできる場として利用しようとした時、お上の方からストップをかけられてしまいました。手続きをとるように言われ、時間がかかってしまいました。（不本意だったのですが）現役の不登校、また、生徒の生の声をくみ、もっと開かれた学校になればと、行政にも伝えたいですね。（中三女子）

☒ 学校に行けない子供でも自立出来、今一生懸命頑張っているのを聞き、大変安心しました。不登

校児を持つ親の気持ちは皆一緒である事とわかりました。

このような場所にもっとたくさんさんの現役の先生が顔を出して、学校側の対処の方法を勉強してほしいと思います。

☒ 現在私は「ホスピスをつくろう」という市民運動を通し、死について考えている。

竹内氏が言われたように、「見えないもの(心)を感じられるかどうか」が、今の教育に問われている大きな問題なのだと思う。親、教師ともに、子供の声を聞いて欲しいと思う。肉親の死を正面から受けとめるというような形で、「死の準備教育」を考えて欲しい。

☒ 湘北で初めて教師関係の不登校の問題をとりあげた公開シンポジウムが開かれたのは大変うれしい。湘南のように、教師と親の交流会を継続的に続けていくことで、不登校も含めて、今の教育のあり方、学校のあり方を共に考え合っていく機会を持てることを。

☒ こういう場へ来ない先生方に勉強していただきたいことばかりでした。

☒ 登校拒否体験者の話(体験談)特に中学教師(管理者を含み)が参加してほしい。相模原市として主催してください。毎月でも、親の会を招いて実施してください。

☒ 不勉強で、来るのに時間がかかり、半分ぐらいしか聞けず残念。今後も開催を期待します。

まとめにかえて

神奈川県教育文化研究所の主催したはじめての公開シンポジウム「不登校をめぐる―子どもの心を探りよりよい対応を考える」は、一九九二年二月二十九日(土)相模原教育会館で湘北教育文化研究所・相模原教育会館の共催、神奈川県教育委員会・相模原市教育委員会の後援を得て開催された。

今回、その報告が神奈川県教育文化研究所ブックレットとしてまとめられるにあたって、司会を担当した者として、もう一度このシンポジウムをふりかえてみたい。

今回のシンポジウムの内容については、このブックレットに述べられている通りである。当日の話からの内容的な変更はなく、司会者・話題提供者・指定討論者の言葉の重複や話言葉的な表現などを読者が読みやすいように一部書き改めただけである。したがって、シンポジウムの雰囲気はこのブックレットからも十分に伝わると思われるが、以下、簡単に特徴を紹介したい。

公開シンポジウムは様々な自治体や民間団体などで多数実施されているし、内容が不登校に関連するものも少なくない。そのような中でも、今回のシンポジウムは全体にあたたかい雰囲気があり、教育現場や医療現場で長い間不登校児とかかわりを持ってきた先生方の経験が話の随所に現れている点で意義深いものであったと思われる。

さらに特筆すべきことは、話題提供者の菅龍一先生の定時制高校教師時代の教え子で不登校体験を持つ越前さんに特別に参加していただき、彼の体験やそのときの悩みを直接伺うことができたことである。シンポジウムの感想の中にも述べられているが、たいへんさわやかな好青年である彼が語る

重い言葉に、司会者を含めた会場の参加者は非常に深い感銘を受けたのである。それとともに、教育においてよき師と出会うことがいかに大切かも改めて教えられた。菅先生との出会いがなければ今の彼はなかったかもしれないし、われわれが彼の体験を共有することもなかったのである。

不登校児という言葉には暗いイメージがつきまとい、一般の人々は特別な子どもを連想する場合が少なくないように思われる。だが、現実の不登校児は必ずしもそうではない。かれらの中には、現在の学校や社会が持つ問題に敏感に反応してしまい、その個性が学校環境に適合しにくいだけという子どももいるのである。越前さんの話を聞いて、改めてこのような感を深くした。

それとともに、竹内直樹先生の話された「心のひび」という言葉も心に残っている。われわれは、不登校児が持つ心のひびに対して、もう少しやさしく理解ある眼差しをむける必要があるのではないか。一見怠惰で何も考えていないようでも、かれらにはかれらの深い悩みや苦しみがあるのである。

永田實先生の四半世紀にわたる不登校児とのつき合いを踏まえた話も、興味深いものであった。不登校児が家庭訪問をした先生に述べたという言葉、つまり「今まで悪いけど先生を試していたんだ。来てくれているけど、それは仕事だから来ているんだろうと思っていた。」を聞くと、子どもは教師や親のタテマエを鋭く見抜いていることがよくわかる。そして、ホンネのいえる関係を非常に強く求めていることも、同時に示されているのではないだろうか。

シンポジウムの進行については、フロアとのディスカッションの時間が少ないなどの問題があった。また、教師や医師以外の立場、たとえば親の側の意見が十分に取り入れられていないという構成上の問題も指摘できるであろう。このような点については、次回以降の公開シンポジウムで改めて問直すことにしたい。

最後に、このシンポジウムを開催するにあたってご協力をいただいた関係者の方々、会場に参加さ

教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐって

——子どもの心を探り、よりよい対応を考える——

1992年6月1日

発 行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2-197
神奈川県教育会館内
☎ 045-241-3531

印 刷：(有)神奈川教育企画
☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN